

ペルソナ5の世界に転生
したオリキャラと冴島
さん+α

滝桜美玲

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

バットエンドが多くなってるペルソナ世界に滝桜美玲と冴島大河たちが入ってそれを直す話。

めっちゃ言葉がおかしくなってる気がする。冴島さんが関西弁じゃないと思う。

特にペルソナ世界の住民がおかしいと思う。

1月25日

タイトル変更しましたプラスαが入っただけ

あとあらすじにたちを追加。

目次

本編 ペルソナ5	
前書きを書き忘れた私であった。本編	
ペルソナ世界に入る前の話	1
最近体調が悪いので寝起きがめっちゃ 機嫌悪くなった人本編ペルソナ世界に 入ったぞ!	8
ペルソナ5! 犯人確保!	20
楽しくなりすぎるな!	36
メモントス突入!	58
暴走	72
2人は……	78
さくらさいたら2年生!	82
遭遇。	97
日記	107
流石に本気を出さないと勝てない……	
b y 翔	116
日記2	125
裏切られた者達の話	
裏切られた者の話 8・戦車編	130
裏切られたものの保護者と??の話	
5・法王編 前編	153
裏切られたものの保護者と??の話5・ 法王編 後編	173

本編 ペルソナ5

前書きを書き忘れた私であつた。本編ペルソナ世界に入る前の話

神咲のバー

神咲翔

神様に名前をつけただけでも神って書きます。だってなんかわかりにくくなるから（自分が）

神「ねえねえここに転生してよ。」

美玲「断る。だってめんどいし。」

神「お願いってばくだってバットエンドばかりなんだよ怪しくない？」

美玲「確かに怪しいけど何で私と冴島さんといかなきやだめなのさ。」

神「だって全員無理だって。予定空いてるの冴島さんぐらいなんだもん。」

美玲「冴島さんに聞いたの？」

神「聞いたよ！だからいいか悪いか知ってるんでしよう！」

美玲 「なぜ逆ギレ。……………はあわかったよ。じゃあお願いしたいんだけどいい？」

神 「なにになに。」

美玲 「これなんだけどダメ？」

神 「えつといいよ神様パワーでできるし。あとこれも？」

美玲 「これしてくれるなら私は行くよ。あとは冴島さんだな。」

神 「ちよつと呼んでくる。冴島さん！」

冴島 「呼ばれたわ。会議中やったんやがどないしよ。」

美玲 「私と呼んだってことにしますよ。」

東城会

「冴島組長が消えたぞー！」

「探せー！！」

真島 「嬢ちゃんか神ちゃんやな。はあ。めんどいわ。」

戻って神咲のバー

冴島 「んで行くんか？」

美玲 「ええ！行くことにしましたよ。でもこれもらえるからラッキー！」

冴島 「何したんや？」

神「これです。」

冴島さんを学生にして。

全ての能力頭脳が欲しい（ペルソナも）

知り合い記憶持ち。

転校生でお願い

冴島「わしそない頭よくないで？」

美玲「私が教えるんです！」

神「あと知り合いの名前教えて。」

美玲「名前はつと。坂本竜司と高巻杏と佐倉双葉かな。」

神「ん？双葉つてお前の一個下……美玲「ネツ友なんだよ。私と双葉ちゃんまああつ

ちは覚えてないみたいけど。」そうじゃあ行くぞ。」

美玲「これが記憶帰るやつなんだね。冴島さんは誰と一緒にがいい？」

冴島「わしは知り合いなんておらんし。じゃあ坂本竜司やな。」

神「なんで？……「なんとなくや。」そうですか。」

冴島「これでええんか？」

神「うん。OK OKじゃあ入ったね。場所は神室町ではなく新宿の舞歌（まいか）町

に家ある。」

荷物もあるから言つとくがこう2だからよろ。」

冴島「ひとつ質問してええか？」

神「何？」

冴島「お金はあるんか？」

神「安心してくださいあなたたちのお金だからまあどんぐらいあるか知らんけどな

かつたらお金貸すけど？」

美玲「私5億持つてるからいいかもしれない冴島さんは？」

冴島「ちよつと待つとれ。……えつと5000万やな。」

美玲「多分足りるべ。というよりもう一個いいー？」

神「何？」

美玲「舞歌町じゃなくてルブランの近くでいい？」

神「えっいいけどなんで。」

美玲「あそこのカレーが美味しいから。電車使うの面倒しだから。」

冴島「美玲が絶賛するとはやたらうまいんやろなー。」

美玲「あそこコーヒーとお菓子が合うんだよねー。カレーもだけど。」

冴島「それは食べてみたいわ。」

神「じゃあ冴島さんもokってことで行くよ！」

記憶持ちについて

ペルソナとかの使った記憶ではなく美玲自身のことについて覚えているかを入れたやつです。

冴島さんは坂本竜司にしたけどなんでなんだろうな。

舞歌町

神室町と同じところで龍が如くのキャラたちがおらずペルソナ5　でいう新宿みたいなところ。

ルブラン

ペルソナ5　の主人公が止まるところでカレーとコーヒーのコンビが美味しいらしい。

5億持つてる理由について。

美玲はなんでもやっているのでお金はその分がっぽり持つてる。秋山さんとか渡してたらいいな。

転校生の理由

美玲は別なところに入っている設定なので転校生にしました

竜司と美玲の関係

中学の友達でめっちゃ仲よかった。

杏と美玲の関係

竜司と同じ

双葉と美玲の関係

本文でも書いたがネット友。掲示板で知り合って普通にネットでも話してるけど覚えてなさそうだからまあ覚えてないよね。

って話なってる。

冴島と竜司の関係

陸上部の大会に知り合いが出るため行っていた。そこで対戦相手が竜司だった。そのあと一緒に挨拶に行きそれでメル友になった。

知り合い（美玲）

ペルソナについて。

ペルソナの召喚方法は美玲は本（ベルベットルームの人たちと同じ）冴島さんは銃で召喚（ペルソナ3での同じ方法）

冴島さんは白虎で美玲は全てのペルソナ持ち。つまり強い。

武器について。

冴島素手で美玲は刃物。銃は冴島はマグナムで美玲はスナイパーライフル。アルカナは冴島さんは節制で美玲は世界。

節制は14枚目で欲望におぼれて度を越すことがないように、適度につつしむこと。らしいです。

正位置の意味、調和、自制、節度、献身。

逆位置の意味、浪費、消耗、生活の乱れ。

世界は21枚目で

正位置の意味、成就、完成、完全、総合、完遂、完璧、攻略、優勝、パーフェクト、コングラッチュレーションズ、グッドエンディング、

完全制覇、完全攻略、正確無比、永遠不滅。

逆位置の意味、衰退、墮落、低迷、未完成、臨界点、調和の崩壊。

バットエンドについて

ペルソナのはバットエンドがある。あとは自分で探してください。

さて冴島さんと美玲はついたみたいですよ。

次に続く！

最近体調が悪いので寝起きがめっちゃ機嫌悪くなった人
本編ペルソナ世界に入ったぞ！

美玲 「ここが家ものすごく綺麗だなく。新しく建てたの？」

神 『うん建てた。めっちゃ楽にできたわ。二人だしね。あと風呂とトイレは別で男女別れてるから』

2階はめっちゃ広い部屋があつてなんか作ろうと思えば作れるよ。』

美玲 「今はいいかな。のちに必要になりそう。」

冴島 「いつから学校や？」

神 『2日後。なんか欲しいものある今ならお金もかからないよ！』

美玲 「金取るんだな。まあいいや私に全ての能力と冴島さんに能力を頂戴。」

神 『ok。じゃあまず中入れ。』

冴島 「わかったわ。」

美玲 と冴島の家。

神 『そこに魔法陣があるだろ？だからそこに紙を置けばいいだけだ。今日を過ぎたら1000円もらうわ。』

言つとくが増えないからなそのまんまだ。あと内容によつては上がるぞ。最高で1000000円だ。」

美玲「わかった。まずそれは置いて戸籍ちようだい。」

神『それぐらいある。今お前らは日本に住むことになった人だからな。だからそこに書けば俺が送つてやる。安心しろ記憶操作もする。』

美玲「じゃあ冴島さんのやつもらつてー冴島美玲だね。」

冴島「これでええんか？」

神『okさてと仕事だー!』

美玲「頑張れー!さて荷物を開けますか。」

はいつていたもの

回復薬

召喚銃

ベツト

制服

お金

サイフ

日常的に必要なもの

服

そなた家にありそうなもの。

美玲 「よーしこれでよし。それでどっちがいいですか？」

冴島 「床でええで。床で寝たほうが落ち着くんや。」

美玲 「そうなんですか。じゃあ明日は学校に行つて校長先生に会いに行きますよ。午後
後にね。」

冴島 「じゃあその間学校周辺を探索しよか？」

美玲 「さんせーい！じゃあおやすみなさい！」

冴島 「ああおやすみや。」

神 『寝たか。これ送つとこ。』

謎の紙。

何書かれてるかわからないもの。

20XX年8月日曜日

美玲 「ふあああああゝゝゝ。んなにこれ？」

謎の紙

全部終わったからこれ渡すな。

目的達成方法は

悪い方向に行かないようにする。

これは私からももうすぐつてちゃんという。

津軽秋のパレス探し。

心の中にあるパレスを探して。

1年間まで。

今あるのはここまで。あとこれはお前らの知り合いに行ってもよし。

あつそういえば秋山さんたちはいないよ。

以上。

p s

あとこの状態はまずいしこれあげるわ。

青い本

全てのペルソナを召喚できるよ。2体合体がうまくいけば強力な力出せるよ。

美玲「へえ。まあ神様ありがとう。あと何時から行けばいいの？」

神「午後に行つてきて今午前8時だから探索してもいいんじゃない？」

美玲「んわかった。冴島さん起きて。」

冴島「おきとるわ。でいつ行くんや？わしは10時ぐらいでええけど。」

美玲「じゃあ10時で。」

2時間後。

美玲 「さて行きますか？」

冴島 「ああ行くで。でまず何するんや？」

美玲 「うちの周辺名にあるか探しましょう。」

冴島 「わかったわ。」

行けるところが増えた

ルブラン

バッテリーングセンター

医師相談（死神コミュがあるところ。）

スーパ―

美玲 「これぐらいですわね。今は11時……小腹が空いたのでルブラン行きましょ！」

冴島 「わかったわ。」

ルブラン

マスター 「いらつしやい初めてかい？ここは。」

美玲 「はい！初めてです！あのなにおすすりめですか？」

マスター 「カレーかなここに来る人はそういうよ。」

冴島 「じゃあカレー2つくれや。」

マスター「あいよ。あんたたち兄弟かい？似てないけど。」

美玲「はい一日違いで生まれたんです。私が母似でお兄ちゃんが父親似らしいです。」
マスター「…そうか。なあお客さん。もしもあんたたちに知り合いの子を預けられたらどうする？」

美玲「ちゃんと育てますよ。引きこもっててもちよつとずつでいいから絆を深めますよ。」

冴島「わしもや。ちゃんとそだてて社会に出すそれが預かった人に使命みたいなもんですよ。」

マスター「！………そうか。すまないな。こんなことを聞いて。」

美玲「いえいえ美味しいカレーが食べれるのならいいです。」

冴島「せやな。美味しそうな匂いもするしの？」

マスター「ああちよつと待つてろ。」

カレー作り中

マスター「ほいカレーだ熱いうちに召し上がれ。」

冴島「ふむうまそうやな。いただきます。！うまいやないか！ものすごくうまいで！」

美玲「お兄ちゃんがそんなのいうなんて珍しい！いただきます。………！！美味し

い。こんなカレー初めてだわ!」

マスター「そうかい。よかったよ。それと今回はタダだ。」

美玲「えっいいんですか?」

マスター「ああ。相談に乗ってもらったしな。あとこれは内緒だぞ?カレーはもう食べさせねえくらい秘密だ。」

冴島「それは嫌やな。じゃあ内緒にするわ。」

カランカラン

??「そうじろう!」

佐倉「双葉!?なぜここに!」

双葉「えっと実はお腹空いたからここにきたんだけど宗次郎の話さつき聞いちゃつて。……そうじろうごめんな。」

佐倉「いやお前のせいじゃ……いや大丈夫だ。双葉泣くな。本当にすまなかった。」

双葉「そうじろぶ〜!うえ〜〜ん!!!」

数十分後。

冴島「ん時間がやばいで。早よいこか美玲。」

美玲「マスター美味しかったです!また来ますよ!」

双葉「…なあ。…美玲「?どうしたの?双葉ちゃん?」えっえつとその用事つてやつ

が終わったらうちにきてくれないか？」

美玲「う〜んいいよ！マスターさんいいですか？」

マスター「本音は家に上がって欲しくねえが……さっき行ったこともあるしいぜ。俺が家に送ってやるから終わったらここに来い。」

美玲「わかりました。お兄ちゃんは……双葉「もちろん兄も来いよな！」ふふふ良かったねお兄ちゃん。」

冴島「はあ。せやな。ここに近くにスーパーあるからちようどええ終わった後に買い物するで。」

美玲「は〜い。じゃあ行こう！お兄ちゃん！」

冴島「邪魔したわ。ほな。」

マスター「双葉まさかあの話をするわけじゃないよな？」

双葉「……そうじろう。私の推理としては……だ。だから話そう。仲間も呼んで。」

マスター「でもどうやって誘うんだ？」

双葉「安心しろ。私にはあれがある。ふふふ。」

マスター「？あれってなんだ？」

双葉「それは秘密だ。そしたら隠した意味ないだろ？」

マスター「そうだな。もうそろそろ客来るぞ。」

双葉「あう。じゃあ先帰るなくじゃあなそうじろう！」

私立秀尽学園高校前

美玲「ここが私とお兄ちゃんがいく学校かく。前の学校喧嘩多かつたもんねく。」

冴島「まあ喧嘩はないやろ。さて行くで。」

学校内。

受付「あのここに転校してくる方ですか？」

冴島「せや。冴島大河と冴島美玲なんやが？」

受付「ああ冴島さんたちですねこちらへどうぞ。」

学校について説明中。

??「おい！はなせ！鴨志田！」

校長「何事ですかな？」

川上「確認してきます。」（はあく。めんどくさいな。）

美玲「？」

冴島「美玲どないしたん？」

美玲「あつえつとここつて喧嘩はないですよね？前の学校はあつたので。不安なんですが…。」

校長「大丈夫ですよ。ただ前から問題がありましたね。それが原因でちよつと荒れてまして……。いや喧嘩はありませんよ?」

美玲「そうなんですか。ありがとうございます。」

???「校長先生!坂本が暴れていましてそれで今から保護者を呼んで話すのできていただけませんか?」

校長「わかりました。鴨志田先生お怪我はありませんか?」

鴨志田「いえ私はありませんが陸上部の子たちが怪我を。」

校長「さて話はここまでです。これをお渡しします。」

私立秀尽学園高校のバツチ

美玲「ありがとうございます!じゃあ帰らせてもらいます。さよなら。」

冴島「すまん。こんな時期に来てしまったんや。ちよつとおかしいやろ?」

校長「いえいえ「そんなことはありませんよ。さよなら。」

冴島「さよなら。」

私立秀尽学園高校前

美玲「どうします?探索してから行きます?」

冴島「探索してからやな。さていこか。」

美玲「うん!……「きゃ!」「大丈夫?杏。」「うん大丈夫。」あの大丈夫ですか?

………つて杏ちゃんと鈴井さん!？」

鈴井「えっ? あっ! 美玲ちゃん!？」

美玲「うん久しぶり!」

杏「えっ嘘! えっなんでここにいるの?」

美玲「えっ? 転校してきたからだよ? お兄ちゃんと。」

杏「あれお兄ちゃんって頭悪くて中3からじやなかったっけ?」

美玲「あゝ違う違う。知り合いのお兄ちゃん。んで冴島になったの。」

鈴井「そうか。あの名前良かったのにな。」

美玲「ありがとう鈴井ちゃん! ンでお兄ちゃん自己紹介!」

冴島「ああわかったわ。冴島大河やよろしゅうな?」

杏「ねえなんで冴島になったの?」

美玲「実はさ家出してそれで知り合いの家の人と話したら冴島になっちゃいなよって
言われて。それでなったの。」

冴島「俺がおらんときにそんな話が。」

杏「あれお兄さん知らないみたいだけど?」

美玲「そりゃあお兄ちゃんがいないあいだにあつたからねあと奇跡的に私の誕生日と
1日違い! すごくない?」

杏「うんそうだね。……………あつ！早くしないと遅れる！はやくいこう。志帆！」

鈴木「うんわかった。じゃあね！」

美玲「ばいばい。さて帰ったら神様タイムだな。すまん神。」

冴島「せやな。じゃあ探索しよか？」

美玲「うんそうだね。」

牛丼屋

美玲「これぐらいですかね？じゃあ双葉ちゃんのところへゴウ！」

次回！

双葉に家に来てと言われた美玲たち一体どうなる!?

次回犯人確保！

お楽しみに！

ペルソナ5!犯人確保!

カランカラン

マスター「いらっしやい。もう終わったのかい?」

美玲「ええ終わりましたえつと時刻は……15時ですね。」

マスター「ちよつと待っててくれ双葉に連絡してくる。」

冴島「はいわかりました。」

マスター「ちよつと待っててくれカレーも無料にするから。」

冴島「このカレーはうまいからの?まあええけど。本当にええんかな。」

美玲「やばくなつたら私たちが支えればいいんです。」

冴島「せやな。んでどうするんや。これから。」

美玲「まあまず一回帰ってから行きましょう。制服じゃあ汚れちやいそうだからね。」

冴島「わかつたわ。じゃあそれで行くんやな。あと……美玲「わかつてますよ。」そう
かじゃあええわ。」

食事中。

マスター「このまま行くのかい?」

冴島「いや一旦帰ってから行くわ忙しそうやし今は16時やな。スマホとか持つてくるわ。」

マスター「ああわかったよ。何時ぐらいにくるんだ？」

美玲「18時30分ですね。じゃあまた後でー。」

マスター「また食べにいらっしやい。」

家に帰宅中&買い物中。

美玲「はあ神出てきなさい。」

神『お帰りカレー食べれた？』

美玲「たべれたよ。美味しかったわー。でこれ送るわ。」

神『いいなうねえ次にお願いするときカレーちようだい。』

神のお願い。

叶えてあげるといいことが!?

神のコープランク1↓2 心の読解

(知り合いになると一個上がってます。だから我汝(我は汝汝は我)がない!)

神コープについて

願いを叶えるには神にたのまれたものをもつてきてください。

それを叶えると神のコープが上がります。

心の読解について。

心の読解とは悩んでいる人がすぐにわかります。

心の読解を使い悩んでいる人を探して願いを叶えよう!

ですが気づかれないようにしないと信頼関係がダメになります。

信頼関係がダメになる。

コープが繋がってる人がストップします。数週間はできません。

そのほかだと変な人だと思われれます。(最終的にはバットエンド。)になりますのでご

注意ください。

美玲「まあわかった持ってくるよ。着替えるから着替えてるあいだに持ってきてこれ

？」

神『頑張るわ。じゃあな!』

美玲「行つてらっしゃい。さして着替えるか。」

着替え&神待ち。

冴島「さてどないなるんやろうな。」

美玲「さあ?」

神『やつと着いた&終わったー!』

冴島「何がや。」

神『いや実はさくこつちの世界にこれることになったんだよ！いえく！』

美玲「？どういうこと？あんたふざけてんの？」

神『いやふざけてないよ。というより行っついていい？』

美玲「まあいいけど。」

神様現代に入り中。

神「ここがかく。やつぱうん！いいなここ。」

美玲「なんでここにきたの？」

神「お前らの保護者役。保護者いないとやばいだろ？あと俺は冴島になんないとな

ろ。」

冴島「まあええけどどないするんや？神「？何が。」年とかや。色々決めることあるや

ろ。」

神「安心してよ。もうそこはやったよ。はいあとこれあげるわ。」

トラの紋章

死神の紋章

美玲「何これ？」

神「それはね。能力を使えるようにしてるやつ。……………冴島さ

んって魔法いる？」

冴島「いらんわ。そこは美玲に任せるわ。」

美玲「じゃあ強化魔法だけでいいかな。私が弱くすればいいし。」

神「そう?じゃあちよつと魔力詰めて……よし完成!」

美玲「これで魔法使えるの?」

神「うん現代ではあまり使わないでね。」

美玲「わかったわ。あと頼んだものは。」

神「はいこれお前影移動あるのに必要なくね。」

美玲「影移動は上の方にあんまりいけないの。行けるなら一階から3階までかな。」

神「そういうこと。まあこれは無限だしいいか。」

冴島「もうそろでるで。」

美玲「じゃあ行ってきまーす。」

神「行ってらっしゃい。はあそれにしても俺甘くなっちゃたな。まあ喜ぶ姿が見た
いからいいか。」

ルブラン 18:25

マスター「いらつしやい。もう行くのか?」

美玲「はい行きます。」

マスター「わかった。ちよつと閉めてくるわ。」

店閉め中。

マスター「……なあんたたちって前世ってあると思うか？」

冴島「あると思うで。」（わしの隣におるしな。）

美玲「私もあると思いますよ。」（私がそうだったし。）

マスター「そうか。……俺もあると思う。俺の前世はここと同じ生活で。神様とやりに支配された話だったよ。」

美玲「そうなんですか？」

マスター「まあこれは夢だと思ったんだが夢になあんたらが出てきたんだよ。」

冴島「わしらが？」

マスター「ああ。前から見ていた夢なんだが昨日見ただけなんだがあんたらが来たんだ。」

美玲「何かあるんでしょうか？」

マスター「わからないがそれを双葉に部屋の前で話して見たんだそしたら……」私もみつ見たぞ！」って言われてな？嬉しかったよ。」

冴島「よかったな。でなんでわしらにこない話するんや？」

マスター「それは……双葉「それは私たちがそれを体験していたんだ。」

美玲「双葉ちゃん？」

双葉「世界が終わったなら何度もしスタートされるんだ。何度も何度も。自分がゲームをやっていてそこで失敗したら何度もし繰り返すゲーム

のように。あるときからそれに気づいたんだでも言わなかったんだ。怖くて……

でも今回の件でそうじろうがそんな夢を見たって行ったとき嬉しかったんだ。」

マスター「双葉……。」

双葉「それでわたしはかんがえたんだ!どうすればこれが終わるかってずっと考えてはダメだって考えてを繰り返してたんだ。」

そして今回はそうじろうに相談してルブランでご飯食べようとしてそして開店する時間に行ったら……。」

美玲「私たちがいたと。」

双葉「最初はびっくりした。でもこんなことは初めてだったんだ。」

前私かわざとご飯ないふりしてルブランに同じ時間に来たときはいなかった。

それで私は宗次郎に行ったもう1つの目的をやろうと考えたんだ。」

美玲 「それは何？」

双葉 「私たちの世界を救ってくれ！お願いだ！」

美玲 「……………」

バカみたいく子供なのね。

「あつご

めん電話だわ。お兄ちゃんその質問答えないで。」

冴島 「わかったわ。ちよつと待つとてな双葉。あとマスターカレーを作つて欲しいん

やが……………ええか？」

マスター 「あつああいいが何でだ？」

冴島 「まあちよつとな。あるんやけど答えられんわすまん。」

カレー作り中&電話中

カランカラン

美玲 「あのクソやろー!!!ざけんなく！」

冴島 「どないしたん? ……美玲 「お兄ちゃんこつちに耳貸して。」

……………それは怒るわ。あいつにあの極みやつたるか。」

美玲 「じゃあ私もやりますよ。」

神 「はあはあはああああ。つつ疲れた。」

美玲 「さあ答えなさい！何で言わなかったの！」

神 「いやだつて聞いたのついきさつきだったんだよ！知らなかったんだもん！美玲がル

プラン行つてるときだったもん。ついさつきだもん!」

美玲「はあああああ!ふぎけんじやないわよ!はやくそいつぶち殺してやるからはよ武器よこせ!」

冴島「まあ落ち着けや。まずカレー食べよか?まずそれからや。」

美玲「チツいいですよ。双葉ちゃん食べよう?」

双葉「おっおう。わかった。」

マスター(はあ店が壊れるかと思った。)-「はいカレーだよ。」

神「いただきます!つくつくまい!なにこれそしたら有名にもなるわ。飯にうるさいあいつがうまいっていうわけだ!」

食べてるよ!

神「ごちそうさまでした。美味しかったー!じゃあ話そうか!」

神コピー2↓3 魔力解放。

魔力解放について。

魔力解放すると全てのステータスが2倍になりクリティカル率が上がる。

でも魔力解放を使うとつぎのターン動けなくなる。

コミュを5上げてる人なら使える。

冴島さんも使える。

美玲「さつき言ったこと話して。」

神「わかったよ。」

具体的に説明。

美玲たちがいなくなったあとさてやるか！と思っていた翔はこのかみさまによばれる。

この時ルブランに移動中の美玲たち。

それを聞くと。ペルソナを使える人やコープコミュができる人を記憶持ちにしたことが判明。

こここの時前世の話中。

んで電話。怒られる。

翔「つてわけき。……神様だつてこと言わないでね。」

双葉「あつあじゃあモナもか？」

翔「モナつて誰かわからないが多分そうだと思う。だから仲間はみんな覚えてるってこといいい。」

双葉「じゃつじやあみんなに連絡してみる！」

ライン

双葉「おーい竜司いるかー。」

竜司「?誰だ?」

双葉「双葉コードネームナビだよ。」

竜司「なっ双葉!!ちよつと待っててくれグループラインに連れてくるわ。」

双葉「しばし待たれよ。」

ライン

怪盗団集結!

双葉「お久しぶりだな!」

春「双葉ちゃん久しぶり!」

双葉「久しぶりだな!春!」

明智「で何の用だい?」

双葉「みんな聞け!この無限ループから出れるかもしれない!」

竜司「どういうことだよ?」

杏「まあとりあえず。みんな来てからね。」

真「ごめんなさい遅れたわ。でなにが起きたの?」

祐介「すまんが俺にも説明してくれ。」

双葉「まずルブランに来てくれ!そしたら説明できる!」

竜司「わかった今から行くよ!」

杏「私も今終わったから行くね。」

祐介「俺もご飯を食べると言って斑目からお金をもらったから行く。」

真「祐介は相変わらね。私も生徒会終わったからいけるわ。」

春「私もお父様から散歩に行くって言ったらいいって言われたから行くわ。」

明智「まああいつのところには行きたくないが……行くか。」

双葉「全員一致だな！じゃあ待つてるぞ！」

双葉「全員来れるらしい！カレーもつくっておけよそうじろう！」

マスター「わかった。美玲って言ったか？ちよつと野菜切ってくれないか？」

美玲「わかりました。」

カレー作り中。

??たち「お邪魔します！（邪魔をする、邪魔するぜ！）」

マスター「いらつしやい。ちよつと待っててくれよな。」

美玲「これでいいですか？」

マスター「ああいいぞ。……美玲なんかやってたのか？」

美玲「いやなにも？お兄ちゃんおわたつたっ!?えっ竜君？

竜司「美玲って竜くん呼びやめろ！」

双葉「w w w w w。」

明智「この人たちは?この人別のところから来たみたいだけど?」

翔「さすが名探偵!そうだよ。竜司君と杏ちゃん、と双葉ちゃんは知り合いにしてくれって言われたんでね。」

双葉「?私知り合ってないぞ?」

美玲「ネット。」

双葉「あつ!まさか死神って美玲だったのか!」

美玲「ごめんね。言わなくて。」

真「ごほん。まずあなたたちはどこから来たの?あとなにしに来たのか答えてもらわ。」

美玲「冴島さんどうぞ。」

冴島「もう言ってええんか?じゃあ言うわ。まず嬢ちゃんの質問やな。まず1つ目は別世界からや。2つ目はこの世界を救いに来たや。」

他にあるやつはおるんか?」

明智「あなたたちの職業とそっちの世界の僕たちはなにをしているかを答えて欲しい。」

翔「俺が説明しよう。まず職業からだな。まあおどろくなつて言っても驚くよな。こいつはヤクザでで美玲は何でも屋だ。」

もう一つはまああんたらがいつも送ってる日常だと思えばいいまあ20歳だけどな。」

春「ヤクザなんですか!?!あつそうだ。年とかも変えているんですよ?じゃあ歳とパワレルワールドから来たんですか?」

美玲「私が答えるわ。冴島さんは52歳私は14歳と20歳よ。あとこいつは不明ね。パワレルワールドから多分来たわ。多分。」

双葉「?14歳と20歳?」

翔「えつと説明するわ。」

説明中

竜司「そんなことが……まあ言わないぜ!」

美玲「ほつよかつたくそうだ言ったらお前らの個人情報全て出してやる。」

翔「きやーこわーい。」

美玲「でなんか質問ある?」

竜司「なあモルガナ呼べないのか?あと俺たちはペルソナを使えないのか?」

翔「呼べるかな。でも面倒いから明日呼んであげるよ。あとペルソナまではきついがかわりはできるな。」

祐介「かわり?なんだそれは?」

翔「まあそれはあした駅に来ればわかる。それまで用意しないときついしな。準備しようとしてたらここの神に邪魔されたし。」

美玲「とりあえずもう時間やばいけどいいの?」 20:30

祐介「まずい!早く帰らなければ!」

真「お姉ちゃんね怒られちゃう!」

春「私も帰らないとお父様に……。」

竜司「俺も怒られるから帰るな。じゃあまたあしたな!」

杏「じゃあ私も帰るよ。じゃあね。」

明智「ねえラインのI・D・もらってもいい?」

美玲「いいけど。冴島さんは?」

冴島「わしもええで。これでええか?」

翔「俺はいいよ。持ってないし。使わなくてもできるし。」

明智「そう?じゃあね。」

双葉「帰ったな。なあ質問していいか?」

美玲「いいけど?なに?」

双葉「なあ本当にこいつは神様なのか?」

翔「俺が言うか。まあ普通に神様ってこんな風に来ない。でもまあ暇だしなメジエド

もうるさいし色々うるさかったしだから来たんだ。

あと言っとくがペルソナは心の中に眠る自分。だから自分の精神がヤバくなれば暴走する。

まあそれはあした言うか。美玲頼んだからな。」

美玲「なんで私。あと止められるの？」

翔「安心しろ。いけるいける！」

神コピー3↓4 能力強化。

能力強化

自分が使える能力の力をアップする。

怪盗コピー3↓4 ペルソナの力アップ（ペルソナ5） 庇う（知り合いだけ）

美玲「…じゃあ帰りますかあした会おうね双葉ちゃん！」

双葉「あつあじゃあな！」

次回

学校で起きる最悪なこととはそしてクズの代表が美玲日が近づく！

次回！

楽しくなりすぎるな！お楽しみに！

楽しくなりすぎるな!

朝!

美玲 「ふーああ朝か。冴島さん起きて！転校生としていくよ！」

冴島 「わかつとるし起きとるわ！」

翔 「おはよう！さてこれあげよう！」

召喚銃×6

美玲 「これ怪盗団の分？」

翔 「そうだよ。」

美玲 「これがかわりか。確かに代わりにはなるわね。」

翔 「だろ？あと準備しろよ！」

美玲 「はあゝい。ふああああ。」

冴島 「眠いわ。」

翔 「ああそうだこれやるよ。」

スタナミンロイヤル×99

スタナミンスパーク×99

冴島「なんでこんなに？」

翔「まあいいだろ？早く着替えな。」

冴島「ああわかったわ。」

着替え中&mp;用意中

翔「紋章はバックのここにもつけなければいいだろう。」

美玲「じゃあ行つてきます！」

冴島「行つてくるわ！」

翔「行つてらっしゃい。」

電車内。

ガタンゴトンガタンゴトン

美玲「眠い。んくなんか読むものないかな？」

冴島「これあるで。」

死神の笑い声く超ホラー小説！ここにある！く

美玲「呼んでみようかな。」

数分後。

美玲「……………読み終わった。」

冴島「読むの早いんやな。どうやった？」

美玲 「なんか後ろに何かいるって感じがしたよー。お兄ちゃんこれ怖かったよー。」

冴島 「やっぱり怖かったんか? すまんなこんなもの見せてな?」

美玲 「ううん。大丈夫お兄ちゃん。でも怖かったけどこういうの好きだよ。」

冴島 「ほうか。」

次は秀尽く秀尽く。

冴島 「降りるで。」

美玲 「はゝい。」

私立秀尽学園高校前

冴島 「はあゝ。」

美玲 「どうしたのお兄ちゃん?」

冴島 「いやなんでもないわ。美玲と離れた嫌やなーと思つて。」

美玲 「大丈夫だよ! 離れてもほとんど毎日行くよ!」

冴島 「ほうか。」

といった感じに彼氏彼女かと思われるきっかけを普通に作るのです。

私立秀尽学園高校内

受付 「冴島さんたちお待ちしておりました。まず職員室に行ってください。これが地

図です。」

美玲 「ありがとうございます。さて行こうお兄ちゃん！」

冴島 「ああいこか。」

さつき会話を途中から聞いていた人は兄なの!?!とびつくりしたらしい。

職員室

?? 「あらあなたたちが冴島兄弟ね。あなたたちの担任をする立華光(たちばなひかり)よ。よろしくね。」

美玲 「あの兄と一緒になんですか！」

立華 「ええそうよ。あれダメだった？」

美玲 「いいえ。ないです。」

冴島 「良かったな美玲。」

美玲 「うんよかった。」ぎゅー

立華 「暑いところ申し訳ないけどあなたたちは1年x組に行ってもらうわ。……。」

美玲 「立華先生?どうかされましたか？」

立華 「実は問題児がいるのよ。坂本竜司っていうんだけど。」

冴島 「それがどないしたん? わしらは生徒。先生は先生や。」

多分坂本ってやつも何かあったんやないか? それを聞いてみる

のが先生の役目なんやないか?」

立華「!えっええそうね。そうするわ!ありがとう転校生なのに。生徒にそう言われるなんてね。教師失格ね。」

冴島さんは大人のように思えたわ。」

美玲「よかったねお兄ちゃん!大人になったね!」

冴島「せっせやな。じゃあはよ行こか。」

立華「もう時間だから私も行くわ。ドアの前で待っててくれるかしら?」

冴島「わかったわ。」

美玲「わかりました。」

始業式の後

1年x組前

ねえ知ってる!転校生が来るらしいよ!兄弟なんだって!

なあそれどここの情報なんだだよ!裏サイトあるのか!

なあ知ってるか?坂本のやろ!鴨志田先生にやばいことして陸上部無くなったらし

いぜ!

へえ最低だなくあはははははは!

坂本「……………」

ガラガラガラ

立華「しずかにしなさい！もう今何時だと思ってるのよだいたいねー。」

美玲「あつあの立華先生あのこれどうすればいいですか。」

立華「どうしたのよ。ってエエエエエエ！」

ざわざわ！ざわざわ！

立華「ちよつと大丈夫鈴木さん!？」

鈴井「あつ美玲ちゃんだ久しぶり。」

美玲「えつえつとそうしたの鈴井ちゃん。」

鈴井「実は今ご飯抜きをどんぐらいでできるかをやっててそれで……〔実は月月経なんだけどどつどうしよ!〕」

美玲「とりあえず保健室行こう？立華先生保健室に運びますね。」

立華「えつええどうぞ。」

美玲「本当に大丈夫？鈴井さんちゃんと食べたほうがいいよ？」

鈴木「でも……………」

冴島「本当にどないしたんやろ？」

立華「多分大丈夫だと思うわ。もう自己紹介してもらいましようか？」

冴島「おっおうわかつたわ。」

立華「まあさっきのは置いときましょう。さてみんなが気になつてる転校生の紹介

よ。入っていいわよ。」

冴島「冴島大河や。よろしゆな。何話したらええかわからんが…俺の下に妹がおるか
ら仲良くして欲しいわ。」

ざわざわ!

えっ何シスコン!?!でもかっこいい!

確かに!かっこいいよね!なんかスポーツでもやってたのかな?

坂本「……………」

ガラガラガラ

美玲「あつ自己紹介してたのお兄ちゃん?」

冴島「ああせやで。美玲自己紹介せいや。」

美玲「言われなくてもするよ!冴島美玲って言います!お兄ちゃんとは1日違いで生

まれました!えっと趣味はうーんなんだろう?」

冴島「料理やないか?美玲の料理はうまいしの?」

美玲「もっもうお兄ちゃんここで褒めないでよ。」

ざわざわ!ざわざわ!

もっもう兄弟じゃなくてももう親子だよ!

確かに確かに!料理なんか美味しく作ってそう!

美玲 「えつと趣味は料理ですよろしくお願いします。」

ざわざわ！ざわざわ！

美玲さんって可愛くない!?

確かに可愛いよねー冴島さんと一緒にいたら護衛とお姫様見たい!

立華 「静かにしなさい！もう！えつと冴島兄弟たちは隣で坂本くんの前ね。」

ざわざわざわざわ

マジかよ坂本の前かよ。

あゝ俺の前がよかつたなー

立華 「静かにしなさい。しないとチョークをうるさい人たちの頭に当てるわよ。」

シーン

立華 「じゃあ座って。じゃあ宿題とか集めるわよ。」

坂本 「……………先生。」

立華 「そうしたんです？坂本さん。」

坂本 「じつ実は……………」

??? 「坂本ゝこれを言ったらお前はもうこの学校に居場所はないと思え！」

ぼたぼた

ざわざわ

あの坂本が泣いてるぞ!

これレアじゃね!

立華「ふっ!」

スカカカカカカン!

痛えー!

立華「静かにしなさい!坂本くんどうかしたの?」

坂本「いいえなんでもありません泣いちゃつて。」

立華「そっそうなの?」「坂本くん何か隠してるようね。それを暴かなきゃ!」

クエストー 坂本の隠し事

竜くん何か隠してるみたい。何を隠してるのか暴こう!

ライン

美玲「冴島さんどうしたんでしょう?竜司君。」

冴島「わからんが何かあるんやないか?美玲が探ったほうがええやろ?」

美玲「まあそうですけど。」

冴島「じゃあ切るで。バレそうやし。」

美玲「はーい。」

数十分後

キーンコーンコーンコーンコーンコーンコーン

立華「じゃあこれで終わるわ、美玲さんと大河さんは後で私の前に来るように。」

美玲「次体育だ。面倒い。」

冴島「まあええやろ美玲。体動かせるんやから。」

美玲「全くお兄ちゃんは体動かすの好きなんだから。さて先生の前に行こう？」

冴島「せやな。」

立華「ああきたのね。それでなんだけどジャージないから制服でやっていいそうよ。」

美玲「あつあの。ジャージの下貸してください。そのく恥ずかしいというかくえくと

……。とつとにかく貸してください！」

立華「ふふふそういうと思ってるわ。」

美玲「立華先生ってところよめるんですか？」

立華「秘密よ。まあ後であなたたちには屋上にきて欲しいわ。」

冴島「わかったわ。んで体育って何するかわからんか？」

立華「確かシャトルランよ。」

冴島「すまん。助かったわ。じゃあいこか。美玲。」

美玲「うん行こうお兄ちゃん！」

体育館

鴨志田「今回はシャトルランだまずは男子やれ！」

ざわざわざわざわ。

俺坂本と組みたくねえ。

だって暴力振るってくるんだろ？

坂本「……………」。「チツクそ鴨志田のやるー！嘘つきやがって！」

冴島「……………」。「なああんたいっしょに組まへん？」

ざわざわざわざわ

すげーあいつ勇氣あんなー！

あああいつめっちゃ強そうだしな！

冴島「でもこの人数だと合わへんな。誰かと組めたらええんやが……………」

??「あつあの！俺も入っていいですか？」

冴島「えっと確か俺の後ろにいたやつやったな。えっと品田って言つて気がするんやが。」

品田「ああそうだよ！そんなすぐに覚えるなんてすげー！俺頭悪いからすぐ忘れちまうだよなー！」

品田龍虎（しなだりゆうこ）

冴島のコミュ相手でもあり後ろの席にいる人。

成績は悪く3教科赤点。

でも手先器用で副教科(歌以外)5を取っている。(音楽の場合3。)

品田「なあ坂本一緒に組んでいいか!」

坂本「ああいいぜ。でもまず鴨志田先生に聞かないとダメなんじゃないか?」

冴島「もう俺が聞いてきとるわ。いいって言ってたわ。」

品田「はえー!はえー!はえーな冴島なあ前の学校どこだったんだ!」

冴島「話は後や。今授業中やで。」

品田「あつやべ忘れてた。」

鴨志田「チツ坂本のやつ!あいつの大事なもん奪ってやる!」

美玲「……………」

女子a「美玲さんって鴨志田先生のが好きなの?」

美玲「えっ?いや違うけど。どうしたの?」

女子a「いや鴨志田先生のこと見てるから好きなのかなーって。」

美玲「いや〜ものすごくかっこいいとは思うけど先生と生徒だしー。私は同年代の人が好きかな〜。」

女子a「えっそうなの!?上の人好きそうなのに……………あつごめん名前前言ってなかったよね。秋山順子っていうのよろしくね。」

秋山順子（あきやまじゅんこ）

成績はよく。中の上ら辺にいる。坂本のことはちよつとよく話してた程度。

美玲のコミユ相手。好きなものは甘いもので目の前にあまいものがあつたらすぐそつちに行く。

ただ体力はなく2でも副教科などでいっぱい取ってる。4と3ばかり。

順子「あつ男子始まるみたいだよ！」

美玲「あつほんとだお兄ちゃんの記事は前125回だったようなく。」

順子「えつ坂本くんより多い！冴島さんって何やってたの？」

美玲「えつと実は前の高校めつちやヤバいとこでそれで……をやってたの。」

順子「えくくく！意外！でも美玲ちゃんも巻き込まれなかったの？」

美玲「もちろん狙われたよでも前から習ってた護身術的なものがあつたから大丈夫だったんだ。」

順子「護身術？何で習ってたの？」

美玲「えつと前生きてたお母さんがめつちや過保護でそれで習ってたの……」

順子「あつごめんいやなこと聞いちゃったね。」

美玲「大丈夫！お母さんが習わしてくれなかったらいまの私はいないから！」

順子「！そうよかったー。ねっねえ美玲ちゃんは何回だったの？」

美玲「シヤトルラン？それだったら126だよ。」

順子「エエエエエ！すごい！私31回なんだよねー勉強ばつかやつてたから。外にあまり遊んでなくて……。」

美玲「体力つけるの手伝ってあげようか？あと護身術も。」

順子「えつえええ！いいいの？でつでも美玲ちゃんも予定あるんじや……。」

美玲「そこは大丈夫だよ！大抵授業聞いてればいけるし今は知り合いさんがいるし！」

順子「でつでもきつそうだなー。」

美玲「安心して普通の体育みたいなものと思えばいいよ。」

順子「そつそう？」

おとおおおお！すげー……！130回だつてよー！

坂本と冴島すげー……！

品田「すごいよ！坂本君！足怪我したのに！」

坂本「はあハアハア。いつつ。ああすごいだろ！」

冴島「坂本大丈夫か？そない無理せえへんでも……。」

坂本「いいんだよ荒治療つてやつだ！」

品田「そつそれつて荒治療つて言わない気がするよ。あつ次は女子みたいだよ！」

冴島「確か美玲は126回だったような?」

坂本「えっ!嘘だろ!俺の前の最高124だったのに!」

品田「逆に二人ともすごいよ。ふっうみんなのかいすうって70なんぼぐらいだから。俺は123回だけ。」

冴島「お前のもすごいやんけ。前何やつとたんや?」

品田「俺か?俺は前陸上やつてたんだよ。まあ廃部になっちまったけど。」(でも俺は廃部になってよかつたーと思つたんだ。)

冴島(なんでや?)

品田(鴨志田のやるやつか鬼畜なんだよ。腕立て200回ーとかまあそれのおかげで体力が上がったけどな。)

冴島(何で廃部のなつたんや?)

品田(さあ。でも噂によると坂本のせいらしい。でも俺はそうとは思わねえ。

とすするわけないしだから鴨志田だと俺は思うんだ。)
だって陸上部のリーダーでいっつも頑張つてた。あいつがそんなこ

「なつ坂本!」

坂本「あつああ。ありがとう。」「もう俺は吹っ切れた!まあダメ元で行くか。立華先生のところに行って話してみよう!」

クエストー坂本の隠し事。更新。

坂本はなんか吹っ切れたようやな。まずわしらが率先していかんとな。

まず立華先生に言わんとあかんな。

坂本「おつ女子おわつたみたいだぜ！えつと……………ええええええ！」

品田「どつどうしたんだ坂本。」

坂本「これ見てみろ。」

品田「エエエエエエ！134回！えつえつ冴島の妹すげー！」

冴島（やっぱ衰えていらんようやな。）

もう一回！（後の人たち）

美玲「お兄ちゃん見てみて！134回！私の勝ちー！」

冴島「ああすごいわ。さすが俺の妹や。」

美玲「エヘヘへ褒められちゃったー。順子ちゃん私褒められちゃった！」

順子「すごいね。はあ45回だった私。誰か褒めて欲しいわ。」

坂本「おつ順子久しぶりだな！どうしたんだ？」

順子「いやシャトルランの記録45回だったから落ち込んでるだけよ。だってここの

人たちが高すぎるのよ！」

品田「まあまあ落ち着いてよでも平均は超えてるんじゃない？ほらあれ！」

女子の平均後44回 前60回

男子の平均後85回 前95回

(作者は平均を求めるのがめんどくさいというより嫌いなので適当です。)

坂本「でも女子の平均超えてるなんてすげえじゃねえか前無理だったのに!」

順子「!そつそうね!前越えられなかったけど超えられたのね!やつやつた!」

体育終わり。

次!社会!

華麗に美玲と冴島はチョークを避けて注目をあつめた!

注目度0↓1

注目度について。

注目度とは視線を集めることが可能。あと探ってきて欲しい情報とかが探りやすくなる。

だが注目度を集めすぎると周りの目が美玲たちの方向しか向きません。

なので4〜6ぐらいの注目度ぐらいがいいでしょう。

最高10まで。

1〜3。へえ〜そんな人いるんだー。ぐらい

4〜6。あつ私知ってる!めつちや〇〇な子でしょ!〜ぐらい

7〜10めっちゃ有名な人じゃん!!ぐらい
上げ過ぎると恨まれたりとかするので注意!

次!国語

ねえねえ知ってる坂本くんの秘密!

ああ知ってる知ってる!陸上部の無くしたやつだろ!?

そうそう!

川上「うるさいわよ!そういうえばカラスって文字があるでしょ?なんで漢字の時は鳥
と同じなのに鳥の時はなんでないしようか!

竜司くんこたえなさい!」

竜司「えつと……カラスは目が見えにくいから。」

川上「あらすごいじゃない。そうカラスは体が黒くて目が見えにくいだよ。」

ざわざわざわざわ

えつとすくくない?あの坂本が答えたぞ!

あの人鴨志田先生に暴力振ったのにすごいわね!

竜司(美玲ありがとう。)

美玲(いえいえどういたしまして。)

仲間の評判ついて

仲間の評判を上げるには

当てられたときに答える。1〜3

学力テストでいい点数を取る。

3000〜2000 なし

2000〜1000 ちよつと上がる 10

1000〜500 普通

500〜300 ものすごく上がる 20

好感度の最大は1000です。

同年代しかできません。あと他の学校の人はできません。

神様と仲良くなれば他のところとできるようになります

坂本竜司 10

高巻杏 20 (鴨志田と付き合ってるから)

品田龍虎 10

秋山順子 30 (学力的な問題ならok。)

これは態度とか関係なしで考えてます。それ入るとめんどいからです。

川上「それで他にもあるんだけど……美玲さん！これについて答えなさい。」

子子

美玲「えつとたしか蚊の幼虫のことを指したはず……ぼうふらでしたっけ？」

川上「！そう！正解よ！あと意味も知っていたなんてね。そう子どもとは蚊の幼虫よ。それで……」

美玲「この漢字難しい読み方するからめんどくさいのよね。」

川上「ということまで！次の時間テストします！難しい読みかたのテストをします！」
国語終わり。

放課後 12:45

順子「ねっねえ美玲さん！あの難しい漢字教えてくれない？」

品田「俺からも頼む！」

坂本「俺も教えてくれ！」

立華「美玲さん。こっちきてくれない？」

美玲「はい。竜司くんあのいつもの場所（ルブラン）に二人とも連れといて。」

坂本「わかった。なあ一回着替えたら学校前にきてくれねえか？」

順子「いいけど……なんで？」

坂本「あそこわかりにくいからなくだから学校前に待ち合わせな13:30までな。
じゃあな。」

品田「わかったー！じゃあ帰りましょうか？」

順子「あつ冴島さんも参加するの?」

冴島「あつああ参加するわ。わしは先に行つとるから二人は竜司についていけばええ。」

順子「そうなの?じゃあ帰りましょうか?龍虎くん?」

品田「あつああ帰ろう。」

立華「んでさつき秘密にしていたことね。……私はベルベツトルームの住人でラヴェンツアつて言います。」

美玲「おい翔。ベルベツトルームつてなんだ。」

翔『ベルベツトルームとはこのバツトエンドとかを選んてる人が使える場所だ。まあ強化場だと思えばいい。』

ラヴェンツア「それでですがまず駅前にペルソナ使いたちも集めてください。」

そして中に入って青い扉が見

えるところでこれをお使いください。」

青い鍵

ペルソナファンならわかるはずまあ使い方は青い扉さすと開くようになってる。

美玲「まあとりあえずみんなを連れてくればいいのね。」

ラヴェンツア「いえあと一人あなたの家に住んでいる人を呼んでください。」

美玲「わかった。……ねえなんでここにいるの？」

ラヴェンツァ「主人に命令されてきただけです。これは他人の体なのできついですが。」

美玲「へえ。これは他の人に伝えていいの？」

ラヴェンツァ「ダメです。冴島様ならいいのですが……。」

美玲「わかった。言っておく。じゃあさよなら立華先生？」

立華「ええさようなら。」

立華光の秘密。

立華の正体はラヴェンツァで主人に命令されたらしい？さあその主人さんは誰なん
でしようかねー？

次回！

漢字の難しい読み方の講座が始まる！

そしてメモントス突入！

次回！

メモントス突入！

お楽しみに！

メメントス突入!

美玲「でも驚きだなー。なんか違う気配感じたけどまさか違うところだったなんてねー」

翔「まつそうだな。俺も行かなきゃならんのか。面倒い。」

美玲「まあまあ先ずは勉強会しないとね。」

ルブラン内 13:30

マスター「いらつしやい。屋根裏で勉強会してるよ。」

美玲「ありがとうございます。」

マスター「まああそこが勉強部屋ね。まあいいけど。今はあいついないから大丈夫だからいいけど。」

美玲「あいつ?」

マスター「いや関係ねえよ。さつさと行ってこい。あとこれあいつらに渡してきてくれ。美玲さんの分もあるよ。」

美玲「はい。」

屋根裏

坂本「あつやつときた！遅えよー。」

美玲「なんでお兄ちゃんまで？」

冴島「俺もわからんところはあるわ。だから教えてもらおうと思っただけやけど？」

美玲「お兄ちゃんは家でも教えられるのに。まっいいけどで難しい漢字の読み方だけ？」

品田「そうだよ。あれなんでああ読むのか分からねえし。」

順子「あれが私にあつたたらできなかつたしな。ねえなんで意味知ってるの？」

美玲「うーん。なんとなく見た辞書に載つててそれを覚えてただだよ。あつても2016年版だったからあつてるか分からないけど。」

順子「そつかー20xx年版じゃないのかーじゃあこれは？」

海星

美玲「ヒトデでしょ。これは簡単でしょ？」

冴島「……………」

坂本「……………」

品田「……………」

美玲「えっお兄ちゃんまでダメ？」

冴島「わしは漢字がダメなんやって前も言ったやろ？」

坂本「俺は国語はダメなんだ。」

品田「俺国語毎回赤点なんだ……。」

美玲「はあ。じゃあわかった。携帯見せて。早く！」

携帯を見せ中

美玲「これでよし！わかんなかったらラインで聞いて。でもテスト中はダメだよ。」

坂本「ああわかった！じゃあ勉強しようぜ？」

品田「お前がそんなのいうなんて……明日の天気手榴弾降ってくるんじゃない？」

冴島「いや違うで。槍やそこは。」

坂本「なんでそんなこと言うんだよ！俺だってそんなこと言うことだってあるわ！」

順子「はいはい喧嘩はそこまでやりましょ？」

勉強中

ピロリロリーン！

坂本「あつやべもう3時か。俺帰るわ。」

順子「じゃあ終わりにしましょう？」

品田「あーやつと終わったよー！」

美玲「お疲れじゃあ先帰るね？行こう？お兄ちゃん？」

冴島「ああ帰るか？じゃあほな？」

帰宅中―

ライオン

美玲「今からえつとどこだっけえーと」

翔「メモメントスがあつた場所」

美玲「そうそこまできてもらつてもいい？」

春「いいんですけど確かモナちゃんが言つてたようなえーつとなんだっけ？」

坂本「確かモルガナが言つてたが………20xx年の4月の最近にできたつて言つてたような？」

冴島「そこは大丈夫だそうや。翔が「こじ開けられるから大丈夫！あと俺の知り合いいるからあかなくても大丈夫。」つて言つたとわ。」

真「そこは適当なのね。」

明智「まあいいじゃないか。まずどんな状態か知らないかね。」

双葉「メモメントスの中つていつも通りじゃないのか？」

杏「わからないと思うけど違うと思う。多分。」

美玲「まあ言つてみればわかると思う。つてやつだね。じゃあ先待つてるねー。」

坂本「嘘だろ！さつき終わつたばつかりなのに………。」

美玲「あははははは。」

冴島「翔の力を使っただけや。」

真「神様なのにそんなこといいのかしら？」

翔「大丈夫!だって神様そこらへんにいるもん。」

美玲「そうなのか。はやく来てー。暇ー。」

冴島「確かに暇すぎて暑すぎて暇や。おっ竜司や。」

坂本「俺はついたぞ。次はおっ全員集合は……してないみたいだな。」

杏「祐介は？」

祐介「すまん!斑目に適当なことを言っただけ遅れた!」

数分後

祐介「ついたぞ。」

ライン終わり

祐介「はあはあはあ。これはいい運動になった。」

冴島「大丈夫かいな?これのめるか?あとご飯あるぞ。」

祐介「これはありがたい!そういえばみんなどこ行ったんだ？」

冴島「全員小説とか買いに行ったわ。わ……ごほん俺は買い終わったからええけど……買

いに行くか？」

祐介「いや大丈夫だ。ん?戻ってきたみたいだな。」

美玲 「あつ祐介さん。これ読んでみてください。」

祐介 「あつああ。これは！俺が読みたかったダヴィンチの小説じゃあないか！」

美玲 「選んでよかったー。あつ私も読みたいので。返してくださいね。」

祐介 「あつああ！わかった！」

坂本 「そーいやあいるのか？あいつ。」

冴島 「あつちの世界にいるで。」

坂本 「でもよー。よーく考えたらよーく異世界ナビないから入れなくね？」

冴島 「それは……多分大丈夫やる。」

美玲 「あいつに電話しないとなー。」

ライン

翔 「おーいさつさとこーい！」

美玲 「今なんか異世界ナビないから行けなくねってなってる。」

翔 「ちよつと待ってろー。」

美玲 「ちよつと待てや！って今なってる。」

杏 「大丈夫かなー。」

真 「まあ大丈夫じゃなかったらメリケンサックで殴ってるわ。」

明智 「生徒会長様が怖いこと言ってるよー。大丈夫なの？」

春「まあ転校してきたらわかることです。」

明智「ごもつともの感想ありがとう。」

美玲「あつラインきた。」

ライン

翔「今インストールしたからきてー。」

美玲「ちよつと待って。」

美玲「今インストールしたって言ったけどある?」

全員に聴き中

美玲「全員あるとじゃあ行きましょ。」

メメントス内

美玲「へえここがメメントス。すぐくあかいわね。」

坂本「なあ怪盗服じゃねえよな今。ペルソナ呼べねえじゃんか!」

明智「そういえばなんかあるんじゃないかな。美玲さん?」

美玲「あるよ。なかつたら連れてきてないよ。はいこれ。」

手渡し中

明智「これを敵相手に撃って?僕たちは武器持つてるんだよ?」

冴島「知つとるわ。美玲説明したれや。」

美玲「説明しましょう。これは召喚銃って言います。まあ召喚するのはペルソナなんです……。」

これやったほうが早いからもうやっちゃうか。

ペルソナ！」ルシフェル

ルシフェル「おやマスター久しぶりだね。イーノックは召喚しないのか？」

美玲「えーと召喚の仕方教えてるだけなのでいまは呼ばないです。」

ルシフェル「そうかい？じゃあ私は天空から見ているよ。ああそうだ。神はいるかい？」

美玲「いますけど。」

ルシフェル「それならちようどいい。これをあげてくれ。」

美玲「なんですこの紙袋？」

ルシフェル「マスターには関係ないよ。じゃあわたしてよね。じゃあ。」

美玲「えーつとこんな感じかな？でも普通喋れないから。あの人がなんかおかしいだけだから。」

冴島「わしのも喋らんかったわ。普通楽しそうやわ。」

坂本「まあ喋れるのかは置いて。これやればいいんだろ？」

美玲「まあそうだね。召喚してみれば？」

召喚中

美玲「……………ほとんどの盗んだ奴ぼっかなのさ……………」

冴島「まっまあええやろ? んでどないするんや?」

坂本「暴走のこと教えてくれるんじやねえのか?」

美玲「……………めんどくさいのとあと翔いないから無理。」

翔「呼ばれて飛び出てじゃジャジャーン! 今からやるのか?」

美玲「私はいつでもいいけど。みんなの問題だな。まず弱いやつで練習してきたら

?」

真「ええそうね。まずはじめのところに行きましよう?」

祐介「でもリーダーはどうするんだ?」

坂本「……………やべえその事考えてなかった!」

杏「うーん真とか?」

真「私はやりたくないわ。だって生徒会長と合わさっちゃうし双葉でいいんじゃない

後ろで支援できるし。」

双葉「わっ私がかがかががリリリリリーダー!? むっ無理だ!」

春「でもジョーカーみたいに命令できる人はいないし……………双葉ちゃんしかいないよ。」

双葉「じゃっじゃあ明智でいいじゃん!」

明智「僕は裏切るんだよ？僕が仲間のことを考えはするけど怪我しても直さないけどいい？」

双葉「考えるんだ!?!そこは置いといて。怪我私のサポートで治せる!」

明智「でもあれ確か自分の気分で決めてるんじゃないやなかつた？」

双葉「ぎくつ!うううじやつじやあモルガナが来るまでな!」

冴島「リーダーは決まっただんか？」

双葉「私がやることになりました。………うううやりたくない。」

冴島「まあええと思うで。双葉頑張りや？」

双葉「はう!わわわわわわかつた!私にまかせんしゃーい!」

美玲「また冴島さん落としてるよ。はあーどうにかならないかなー。」

??「まああいつは天然だからしょうがない……………俺もだけど。」

美玲「影島さんお久しぶりです。」

影島「おう久しぶりだな。美玲。なんか騒がしいと思ってきたら美玲たちとはなー。

あいつらここの世界のやつか？」

美玲「ん。そうらしい。翔が言ったのって聞いてたの?」

影島「ああ聞いてたし見てた。影だしな。そんなもん楽なもんよ。」

美玲「へえー。まあいいや。そういえばどうしたんですか?」

影島「いや実は最近騒がしいんだよ猫が脱走したーって。なんかうるさいから逃げてきたんだよ。」

美玲「へえー。で要件は？」

影島「流石に美玲も慣れたな。実はそいつがあそこにいる仲間たちの仲間らしいんだが…俺の力じゃこつちに連れてこれないんだ。」

だからあいつらに1つクエストをあげようかなって。」

美玲「ふーんでそのクエストって？」

影島「俺を護衛してほしい。さつきここに来るまで力を使ったんだが…久々すぎてな疲れたわけよ。だから護衛してくれないか？って。」

美玲「へえーじゃあ呼んでくるから待ってて。」

呼んでる間に人物紹介

影島

冴島さんの関西弁を取ったバージョンで冴島の影。

冴島さんの能力はほとんど同じだが使える武器のモーションが違う。ハンマーのヒートアクションだと。ハンマーをぐるぐるってやって叩く

品田の棒持った時のヒートアクションと同じ。ペルソナは白虎で氷とかを操る。でもほとんどが物理。祐介と同じ感じ。

この世界について。

この世界つまりペルソナ5の世界。

でも美玲たちが入ったため少しストーリーや他のやつも違う。

あとペルソナ5と違って主人公がバットエンドばかりやっているため。記憶の残っている人がいる。

これは初めらへんに書いたので書きません。

アンテのフアンの人が作ったやつみたいな感じだと思ってくれるとありがたいです。ちよつと若干ずれているって考えてほしいです。

美玲「つて事で影島さんを守ってほしいの。」

影島「影島だよろしくな。」

双葉「あれ関西弁じゃない?」

影島「俺は俺だからな。関西弁はめんどくさいんだ。なつまスター?」

冴島「……早よ行けや。」

明智（冴島さんは怒らせないほうがいいな。）

双葉「じゃあ! 護衛スタート!」

美玲「はあーどうせあいつもくるんだろうなー!」

影桜「呼ばれて! 飛び出て! ジャッ! ジャッ! ジャーン! 何ー呼んだー?」

美玲「呼んでない。」

影桜「はあーひどいなー。せっかくこの情報あげようと思ったのに。」

美玲「あつそう。でもへんなものだったらメリケンで殴ってもらうから……冴島さんに。」

冴島「わしにか? まあええけど。」

影桜「げつ嫌だなー。まあいいや。まずお前らの来て欲しいと思ってるやつここにいないからやつぱりパレスかもな。」

美玲「まだここにいないから当たり前じゃない?」

影桜「まあまあまあ話は最後まで聞く。前はいたんだ。前はここにいたんだ。でもなんかものすごく暗くてな。」

美玲「?ここにいた? って事は心中では嫌がつてるって事になるよね?……矛盾してない?あとあんたここに住んでるの?」

影桜「そうだけど?あそこなくなっちゃって現代の方の行ったんだけど暇だからこっちに移動した。」

冴島「だから影島もいたんやな。」

影桜「言つとくけどあいづらは仲良く一緒に本人の影の中で寝てるわ。」

美玲「……そう。」

翔「話終わったー？……おつそれあいつからかプリーズ。」

美玲「はい。何かわからないもの。」

翔「よっしゃー！やつと届いたー！」

美玲「なにそれ。」

翔「これはパレスの持ち主がどんなことをしてるかわかるものー。」

冴島「鴨志田の奴は俺がみるわ。」

美玲「そいつ以外は任せて。ちよつとあいつのはみたくないわー。」

影桜「まあ私も死んでもみたくない。」

翔「そういえば暴走どうしよ。………影桜が中に入ってやった方が負担ないからそれで行こう！」

影桜「はいはいやりますよ。じゃあ待ちますか。」

暴走のことについて知るペルソナの人たち！

そして戦闘シーンはほとんどかけない私！

さあどうなる！

次回暴走！

暴走

坂本「はあはあ疲れた。モナいないからきつい。」

翔「よーしきたな！まずは紹介だな！」

影桜「どうもー影桜でーす。美玲の影でーす。こっちにきたからこっちに移動するこ
とになりましたー。」

美玲「私が一瞬で殺したいランキング2位の人でーす。1位は翔でーす。」

冴島「一瞬で……………ええなー。わし一瞬であんまり殺せないんや。……………ええなー。」

坂本「いやそこかよ！いや確かに一瞬で倒したい気持ちもわかるけど！つてなんで俺
が突っ込んでんの!？」

双葉「モナがいないからか。これもう崩壊してんな。」

明智「……………ねえそしたら僕たちのもいるのかい？」

影桜「さあ？だつて牢屋の中にいるんでしょ？そしたらいないんじゃない。あと召喚
できてるんならそんなかでしょ。」

明智「そうか…やっぱロボインフットのままなのか。」

翔「ほうほう。そういうことねー。」

美玲「何がさ。」

翔「明智は暴走を体験してるんだよ。まあ周りを暴走させてたらしいし。」

春「じゃあ明智くんのが暴走だとしたらそれがなんか関係あるの？」

翔「そうだねー。んー簡単に言うると暴走とは精神の暴走だ。そうだなー例えばー竜司！大事な人が死んだらどうする？」

竜司「なくな。そして仲間がいなくなったら自殺してるかもしれない。」

翔「そう！自殺とか怒り頂点に行くと人は暴れてしまう泣いたり暴力で訴えたりな。それが暴走だ。まあ美玲の場合……」

無理矢理やってるだけだからもう理性はないね。明智の暴走は理性があつたらう？それのもつと激しいものと思えばいい。」

冴島「美玲の暴走は強いんや。というわけで翔能力封印や。」

美玲「まあいいけど。じゃあペルソナは1つにしてくれない？」

翔「おkおk任せてくれ！」

双葉「なあ。暴走って私たちにもできるのか？」

翔「んーできるけど時間めっちゃ必要だよ。1人5時間。だから休みがいいね。」

双葉「ふーんじゃあそれを戦闘で生かせるのか？」

翔「まあできるな。でも一歩間違えると戦闘不能になるぞ。」

双葉「そうか……………」

翔「でも明智はいつでもできるぞ。まあ暴走体験者だから普通に理性は持てるだろ。」

明智「…………でもさつき試したけどできなかったよ?」

翔「まあ原因がないからじゃない? そのくあいつがいないからとか?」

明智「なるほどそれはあり得るね。僕がいやだと思っていたのは屋根に住むゴミのくせにいつぱい仲間持ちやがってつてことだしね。」

美玲「探偵王子とは思えぬ言葉だわー初代を見習ってほしいわー。」

明智「まあこれは心の中の気持ちだから。これは本音つてやつだよ。」

春「まあみんな心の声は違うわよね? だからいいんじゃないかな?」

真「…………そうね。…………お姉ちゃんと戦わないといけないのか…………。はあー。」

双葉「私はお母さんに合わないといけないんだぞ。」

真「そうだったわね。ごめんなさい。」

双葉「まあいいけどな!」

美玲「もうやっていい?」

双葉「みんな! 準備はいいか!」

みんな「おお!」

美玲「さーて行くか！さあ！悪魔の時間の幕開けよ！出でよ！Death！」

翔「さーて俺は応援でもしてるか。ガンバー。」

冴島「行くで！美玲は全体攻撃が主に使うんや！だから真っ先に仲間がやばかったら回復しとけや！」

美玲「シャーシューシュー！」 火炎弾！ 三ターン後火の玉が落ちてくる。 地獄に幕

開け！ 全員のステータスダウン！それに加えて仲間召喚！

双葉「今召喚されたやつは放置だ！あとさっきの玉は注意しろ！」

竜司「了解！よっしゃあ行くぜー！ペルソナ！キャプテンキッド！」 チャージ！物

理攻撃力次のターン2倍

杏「ゲットレディ！」 タルンダ！ 攻撃力ダウン（三ターン）

祐介「我は汝！ゴエモン！」 ハマスクカジャ！ 全員三ターン回避、命中アップ

真「きて！ヨハンナ！」 ハマラクカジャ防御力アップ！（三ターン）

春「きて！メラディ！」 トリプルダウン！ ヒット

明智「来い！ロビンフット！」 メガトンレイド！ ヒット！

冴島「こいや！白虎！」 チャージ

翔「さーて美玲はどうするかな？」

美玲「コワレロ！」 Death 破壊の準備 攻撃力2倍 回避0 防御0になる。

(3ターン)

竜司「ペルソナ！」メガトンレイド クリティカル！

杏「ペルソナ！」コンセンレイド！ 魔法攻撃力次のターン2倍！

祐介「ペルソナ！」ハマスクカジャ！

真「ヨハンナ！」フレダイン！ヒット！

春「メラディ！」サイダイン！ヒット！

明智「ロビンフット！」メガトンレイド！ヒット！

冴島「白虎！」四神白帝！単体に向けて特大ダメージチャージするとチャージの2倍が4倍になって攻撃される。5回攻撃する。critical！

美玲「グツ。もうダメだー。暴走久々すぎて無理！きつい！あと冴島さんそれずるい！」

冴島「いや防御力0って聞いたならこれやるしかないっておもったんや。」

美玲「じゃあもしもやらなかったら？」

冴島「八景五頭やってたわ。」

八景五頭 必ずクリティカルが出る 特大ダメージで防御したら普通にダメージが入るが無効とか反射とかを貫通する。貫通しても普通。

美玲「ひどい。」

竜司「でどうするんだこの後。」

美玲「帰るー。」

祐介「ああそうだな腹も減ったし。」

翔「なんか忘れてるような……。まいつか。」

??「まあいつかつで済むわけないだろ！」

??「そうですね。この世界を救いにきた人達。」

美玲「あなたたちは？」

2人「私たちの名は……」

続く！

2人は……

?? 「私の名前はカロリーヌです。カロちゃんも行ってもいいですよ。」

?? 「おいカロリーヌ！それでは舐められるぞ！私に名前はジュステイーヌだ。よろしくな。」

美玲 「よろしく。で何しに来たの？まさか迷子？」

翔 「とう！」

美玲 「痛いじゃない！何すんのよ！」

翔 「この子達怒らせるなよ。」

美玲 「？わかった。けどひぎ蹴りってひどいわ。」

冴島 「ああそれはひどすぎるわ。するならパワーリアットやろ。」

翔 「あつそうか！じゃあ次から！」

美玲 「使わなくていい！」

竜司 「……あれ？なんか見覚えがあるんだが……。」

双葉 「そりやあるだろうな。………だつてあいつが何度も倒してたもん。」

祐介 「そうだったのか？覚えてはいないが……だが何故か震えが止まらない。」

?? 「ふっふっふっふ。そうだろうな！」

杏 「え!? モナ！」

モナ 「久しぶりだなお前ら！」

竜司 「モナ！おおおやったぞ！回復役がいる！男性陣に回復役が！」

美玲 「なんかめっちゃ聞き覚えが……」

翔 「気のせいじゃない？ どうしたんだ。モナとお2人様は？」

カロリー又 「あなたたちが来ないからです。主人も待っています。」

翔 「行きたくねー。めんどくさいし俺先帰るわ。頑張つて。じゃあー」

冴島 「あつ逃げたな。追いかけてええか？美玲。」

美玲 「いいですよ冴島さん。追いかけて。めんどくさいんだろうね。」

ベルベットルーム

こつからは茶番ばかりなのでカロリー又たちに話しを簡単に話すと。

あまりやりすぎるな。あと2人（冴島さんと美玲）は囚人（主人公）が本性を出した時に戦え。

これはあまり主人公に変な行動をさせないようにしているだけです。

だから4月から11月はほとんどやることはない。

美玲 「なるほど。めんどくさいってことはわかったけど。やることがあんまりないの

か。暇だなく。」

カロリーヌ「だがそれでは変わってしまったのだぞ？」

冴島「じゃあれべりんぐ？ってやつをやればええやないか？」

竜司「たしかに！でもしたら俺たちのレベルマックスになってそしてあいつになんかされるかもしれないぞ。」

イゴール「それはない。私がそれを許さんからだ。」

美玲「さすがラスボスと裏ボスがいる場所だね。」

双葉「これネタバレじゃないのか？」

美玲「なんの話？」

双葉「なんでもないぞ！そしたらどうやって美玲たちがくるんだ？」

美玲「うーん。こうヌルつと！くる。」

竜司「うわ！怖！」

真「まっまさか！幽霊じゃないでしょうね！」

美玲「そんなわけw w w！あつ後ろにお化けが！」

真、杏「キヤアアアアアアアアアア！」バシン！

竜司「なんで俺が!?!」

美玲「お約束だね。それは。」

冴島「ああセヤナ。」

竜司「お約束ってなんなんだよ〜！」

さ〜くらさいたら2年生!

帰宅

そして半年も過ぎている!

美玲「どんだけだよ……。」

冴島「まあ普通にそうしないと作者がやばいんやろ……。それより2年生やな。」

美玲「確かこの時に彼がくるんだっけ?」

冴島「そうやな……。って何やってるんや?」

美玲「そういえば部活やってるって言ってなかったっけ?パソコン部やってるから

ノートパソコンを持ってってるんだよ。」

冴島「俺はバレーボール部なんやけど……。」

美玲「確か陸上部も誘われてたよね……。廃部になったけど。」

冴島「まあせやな……。でもちようど鴨志田を監視できるからええやろ?」

美玲「そうですね……。」

冴島「明日から学校やし寝るか。」

美玲「そうですね……。寝ますか。おやすみなさい。」

冴島「ああおやすみ。」

翔「こんにちは。説明係の翔です。佐倉さんと竜司のお陰で彼の正体がわかりましたね。サタナエル……。あいつとはね……。

まあそんなことはさておき……。俺が黄龍と連絡していたな。それは一応その時はちよつとだけ力はあつたからな。使えたんだが……。

今は使えないな。黄龍は佐倉の影だ。そういえばなぜ黄龍かというところを10にすると作れるペルソナが黄龍だからだ。

それだけなんだけどな……。何かわからないところがあつたら言ってくれ。語彙力ほとんどない……いや書く力がない作者が答えてくれるぞ。

前も言ったような……。まあそんなのは置いといてくれ。それでは続きをどうぞ。」

冴島「なんか翔が解説してる夢を見たんやけど……。」

美玲「同じく……。ふあああ〜！眠い……。」

冴島「さて学校行くか。」

美玲「は〜い。」

学校に行く途中。

美玲「ん？……あ高巻さん。おはよ。」

高巻「おはよう！……今日からだね！」

美玲 「うん。頑張ろう!」

冴島 「早よ行かんと間に合わないで。」

美玲 「は〜い!」

冴島 「じゃあな〜!」

美玲 「またね〜!」

高巻 「うんまた後で!」

美玲 「さて吉が出るか凶が出るか……。」

学校に移動中

美玲 「おはよう〜!三島くん!」

三島 「あつうん……。おはよう。」

美玲 「元気ないな〜。まあいつか頑張ろうね!」

三島 「あつうん……。」

教室

美玲 「おはよう。」

秋山 「おはよ〜!久しぶり!」

品田 「全く……。そんなに元気に飛び込むなって……。」

美玲 「生徒会だ〜!逃げろ〜!」

品田 「こら！逃げるな！」

冴島 「落ち着けや。」

美玲 「は〜い！」

品田 「全く……。」

始業式をしたあと

立華 「早く座りなさい！今日坂本くんは来てないです……。知ってる人がいたら教えて欲しいです。」

「いや知らねえな……。」

「あーでも見たかも！確か転校生だっけー？と一緒に رفتてたよ〜！」

立華 「本当ですか……。坂本くんは迷う人ではないと思うのですが……。」

「始業式に出たくないからじゃない!？」

「確かにあり得る……。」

「あと転校生ボコってんかも!？」

品田 「みんな静かに。先生の話を聞くように。」

立華 「品田さんありがとう。それで今日やることは……。」

冴島 「始まったんやな。気になるわ……。」

美玲 (坂本くんは大丈夫だよ。多分。)

坂本「すみませんっす！遅れました！」

「お。本人登場www！」

「あーやつと来た〜！遅いぞ〜！wwwwwww！」

「どうだった!?転校生かつこよかった!?」

坂本「普通だったよ……。」

「まじか〜！」

立華「静かにしなさい！えい！」

「「ふ！見切っている！」」

坂本「よつと。チョーク無駄にしたらダメっすよ。先生。」

立華「くう〜！ついに素手で……！美玲さんと冴島さんだけだと思っただのに……！」

「！」

坂本「野球やってたら身についたっすよ。」

立華「な！野球だど〜！こうなったら私も野球を！」

坂本「まあ嘘ですよ。」

立華「嘘ついたな〜！こうなったらこの刑だ！」

反省文の刑！

坂本「げえ〜。」

立華 「フフフフ！嘘ついた刑と遅れたから当然よ！」

美玲 「ふふふふふふ！」

冴島 「あははははははは！」

立華 「なっなんで笑つてるの!？」

美玲 「立花先生私がいるんですよ……。と言うことは！」

冴島 「教えれば簡単に終わるんや！」

立華 「なっ何〜！そうなたら私が防いでみせる！」

「お〜！今日も気になるな〜！」

「じゃあ行つてみようぜ！」

生物

先生 「おはよう。今日は生物だ。簡単なことをする。この水の入ったバケツを回すとなぜか水がこぼれない。それはなぜかわかるかい？」

秋山さん！答えをどうぞ！」

秋山 「え〜と……。遠心力？」

先生 「正解です！まあこれは簡単ですよ。じゃあそうですね……。美玲さんに聞きま
す。さっきの遠心力は置いといて……。

象と鼠がいます。どちらが先に死ぬでしょう。」

美玲 「ネズミですね。なぜかと言うと……。」

「おっとそこまで……。私が説明します。ネズミは小さい生き物。象は大きい生き物。ネズミの心臓は早く動き。象の心臓は遅く動きます。

なので早く動くネズミが死ぬのが早いです。」

冴島 「なんでネズミは早く動く心臓が動くんや?」

「おっと冴島くんいい問いだ!象は1に1回3秒でハツカネズミというネズミは0.1秒だ。ネズミは早く移動する象は遅く行動するんだ。

まあ最初の一説なんだけどね。」

冴島 「ほ〜。そうなんや。」

「ほかにもこんなのがあつて……。」

キーンコーンコーン〜。

秋山 「やつと終わったね。」

冴島 「なんか美玲ばっか集中砲火食らつてた気がするけどな。」

品田 「二番目は俺ですね……。なぜ?!?」

美玲 「生徒会だからだよ。あと坂本くんは……。あ。逃げてる。」

品田 「足大丈夫か?あいつ。」

冴島 「まあたまには走らないと逆にイラつくらしいで。」

品田「バカだな……。」

美玲「……………」

秋山「どうしたの？」

美玲「今日のご飯どうしようかと思って……。」

秋山「美玲ちゃんらしいね。」

キーンコーンカーンコーン！カーンコーンキーンコーン！

品田「もう帰る時間だぞ。……冴島と美玲は違うのか。」

美玲「まあ部活だからね。まあ全然やってないけど。」

冴島「まあ俺は躲すのが楽しいんやけどな。」

秋山「部活楽しんでるみたいだね！」

品田「だがバレー部は黒い噂があるが……。」

冴島「まあそうやな……。ほとんど嘘やで。」

品田「じゃあ三島が怪我してる理由って……。」

冴島「三島から聞いたんやろ？その理由や。」

品田「そっそうか……。わかった。」

秋山「じゃあ帰ろっか！品田さん！」

品田「はいはい……。じゃあ。」

冴島「じゃあな〜。」

美玲「バイバイ〜! ……ねえ冴島さんさつき言ってたのって……。 躲すのが楽しいって……。」

冴島「ほんとや…。めっちゃ楽しいんや! なんていうか…。 う〜んいい表せないわ! とにかく楽しいんや! 回避力アップや。」

美玲「そうですね。あつじやあ私こつちだから。頑張つてね! お兄ちゃん!」

冴島「頑張つてくるわ。美玲。」

美玲「失礼しま〜す。」

???「お! キタキタ!」

??「お久〜。」

美玲「小江原先輩と明聖先輩今日は来たんですね。」

明聖「ああ。来ないとダメだつて……。」

小江原「俺も……。テストの点数落とすつて……。」

小江原昭人（こえばらあきと）

男。パソコンなら任せろ! 部長。3年生を2回ほどやつてる。

明聖命（めいせいめい）

女。明るすぎてビビる人。男つぼく喋る。副部長で小江原と同じクラス。

美玲「それは……落とす点数があるのか心配です。」

小江原「なっ!? あるわ!……ちよつとは。」

美玲「じゃあパソコンで答え見てみればいいじゃないですか?」

小江原「ここ……!に俺の答えを書いてよかつたぜ……!」

明聖「まあ私はいけるけど……。でももうそろそろやばいと思うよ。」

小江原「ああわかつてるよ!というよりなんで俺の方が上なのに美玲と命の方が頭がいいんだ!美玲は2年なのに!」

美玲「勉強してるからですかね?ちゃんとしてないとまずいですし……。というより何故かわからないけど自習の時

私だけ3年なんですよ。怖いわ。全教科3年は無理……。」

小江原「おやく!苦手あるの〜!」

美玲「うわ……。うざい。ありますよそれぐらいありますよ。人間誰もが完璧というものではないんですよ。」

小江原「うざいつて言われた……。!それでなんなんだそのダメな教科!」

明聖「私も気になる!だってそれで責めれたらめっちゃいいじゃん!」

美玲「ドsだ……。実は……。保健です……。」

明聖「え?……まじで!昭人の得意教科じゃん!よかつたな!」

小江原「やった〜! 一つだけ勝てる〜!」

美玲「それ以外は勝てないくせに……。」

小江原「だが一つだけ勝てる! 良くし! 頑張るぞ〜!」

明聖「かんばれ〜! でもまずは部活な。」

小江原「は〜い!」

美玲「は〜い。」

部活中。

小江原「よし! 今日はこちらまで!」

明聖「じゃあ帰ろっか?」

小江原「おう! じゃあなく!」

美玲「はいさようなら〜。さて……。冴島さんの様子でも見に行くか。」

冴島「三島!」

三島「あつ!」

冴島「大丈夫か?」

三島「あつうん。大丈夫。」

鴨志田「三島……! 貴様は何度言ったらわかる!」

三島「はい……。」

冴島「鴨志田先生。三島は悪くないんや。俺のパスが悪かったんや。」

美玲（おお……。見事な躲し……。）

鴨志田「ふん……！三島。あとでこいよ。」

三島「はっはい。」

美玲（レコーダーしたし帰っていいんだけど……。様子見てきた感じで見てくるか。）

冴島「？……何やつとるんや美玲。」

美玲「あ。お兄ちゃん。えつと……。ちようど帰ろうつと思つて……。部活終わったかな

くつて思つたんだけど……。まだみたいだから帰るね。」

鴨志田「おお。美玲か。女子バレー部にこないか？」

美玲「すいません……。私運動より本とかを読む派なんです。」

鴨志田「いやだが」

美玲「あ。もう時間なんで帰りますね。さようなら。鴨志田先生。」

冴島（見事なかわしやな……。）

鴨志田「……チツ！お前ら！さっさと練習しろ！」

「はっはい……」

冴島「さてもう一回行くでえ！三島！」

三島「うっうん！」

美玲 「さて…翔今日のご飯は？」

翔 「ハンバーグ。」

美玲 「シャ！私めっちゃ好き〜！」

翔 「はいはい。」

美玲 「じゃあできたら呼んで〜！」

翔 「はい。」

美玲 「今日どうせ私の悪い噂が来るから……。ハッキングするか。」

裏ネット

「ねえ美玲さんってあの生徒と付き合ってるんだって〜。」

「あくそれ聞いた〜！マジウケルwwwwwww！」

美玲 「ほ〜仕事はや。まあこんなの楽勝！これをこうして……。」

「ん？なんか来てんだけどwwwwwww。」

「なにがwwwwwww。」

「あなたの噂をバラすってきたwwwwwww！」

「それは草wwwwwww！」

裏 「菊池大介（きくちだいすけ）18歳。彼女が五人おりそいつらをソフレとしている。名前。荒業母（あらぎいちご）、祠目姪（ほこらめい）

三島由紀（みしまゆき）、齋藤美希（さいとうみき）、鞠智玲子（さいとうれいこ）
「うわあゝ。最低。」

「そんなことしてねえ！」

裏「私の情報量をなめないてください。三、二、一年と先生の秘密は全て知っています。」

「お前誰なんだよ！」

裏「自分で探してください。まあ見つからないと思いますが……。警察を使ってもいいですよ？ どうせ……バレませんか？ 後……その情報

……言ったらみなさんのすっごく恥ずかしい過去をキイッターに書かせてもらいます。ご安心を。全てあなたたちのキイッターに書いてあげます。一人……言ったらですから。せいぜい口を滑らせないように……。頑張ってください。」

翔「おくい！ ご飯できたぞ〜！」

美玲「わ〜い！ ハンバーグ！」

冴島「ただいま帰ったで〜。」

美玲「おかえり冴島さん。」

翔「まあ……面白かったぞ。パレス内は。」

美玲「こっちはほとんど終わったから……あとは精神的に……。ふっふっふっふっふっふっふ」

！」

冴島「…こわっ。」

終わり!

キイツター

鍵とつ○○たーと合わせたものほとんど同じ

遭遇。

「おい知ってるか？」

「ああ知ってる…。昨日のやつ本当だったんだな…。」

何があったんだ…？というより…こんな事起きてない…。

「キャー！」

「あつ。」

「あつごめんなさい！わぎとじゃなくて！」

「手伝うよ。」

「えっ？でも…。」

「重そうだったし…。二人の方が早く着くよ。」

「あつそうだね。ありがとう！」

「この子は…見たことないし…。誰なんだ？」

「私は冴島美玲！君の名は？」

「中野…心（なかのしん）です。」

「中野くんって噂の転校生でしょ？………普通じゃん。」

「え？」

「?どうしたの？」

「普通ですか…？」

「うん。普通。そこら辺にいる高校生だと思うけど？」

「……………そうですか。」

「まあ所詮は噂なんだから。気にしてないしね。煙がたつてるなら…。水とかで消さないよね。」

「……………そうですか。」

「あつここがいいよ。ありがとう神斬君！あつえくつと恩返しは後でするから！じゃあね！」

「あつああ…。」

ヒソヒソ…。

「ねえねえ。美玲さんあの転校生に手伝ってもらったんだって！」

「あつ見た見た！でもさ。あの転校生感じ悪いよね。」

「確かに。だって髪の毛やばいもんね！あはははは！」

「……………。」

教室に戻ろう…。

「は〜！ドキドキした！」

「あの転校生と話すなんてすごいね。」

「なんでさ。」

「だってナイフ持ってるって聞くし…。」

「それ噂だよ？噂ぐらいで驚くなんて…。秋山ちゃんたらおつとめ〜！」

「もつもう！やめてよ〜！」

「何してるんだ。」

「あつ品田。転校生と美玲が転校生と話したって知ってる？」

「知ってるよ。噂になってるからな。」

「え〜一気にモテ期きちやう〜！」

「いやそれはないだろ…。ふつうにいじめられるだろ。」

「そんなの粉碎すればいいんだよ！」

「怪我負わせたら流石にダメだからね？」

「わかってるって！」

なぜ〜うなつたし。あ〜ぶつかんなければよかつたあああ！

「ねえ〜！付き合ってるのか聞いてんのにさ〜！」

「そうそう！なんで無視してんの〜！」

「最低〜！アハハハハ！」

クツソむかつく！なんなの！こいつらまとめて…。いやダメだな怒られる翔に怒られるのはいいとして冴島さんは怖い。

「話聞いているか聞いてんだよ！」

「キャー！」

「キャー！だつて！」

「アハハハハ〜！うける〜！」

「あつそうだ！あいつらに犯して貰えば!？」

「いいね！それいい！やろう！」

……やっぱ無理。

「あんたの方が最低だわ。」

「は？」

「あんたの方が最低つつつてんの。あく。そうか学年の中の下の人にはこの言葉わからないか〜！」

「なつ何言つて！」

「あのねえ…。後ろ盾あるからつて油断してんなこのブスが。」

「なっ何言つて……!」

「これなくんだ!」

「mp3……!?!」

「これを加工して。私がいじめられていたところだけをやったらどうなるんだろうね〜!」

「っ!逃げよ!」

「……ハア。ばっからしい……」

「あんなに怯えるとか……。バカだなあ……。……まあ絶対あいつらこいつが脅した〜!とか言うんだろうけど……。まあ……!」

「そんな時はそんな時だよね〜!」

「あっ!」

「あつとごめんなさい。大丈夫ですか?」

「はい大丈夫です……」

「……君って新聞部?」

「……ええ。そうですが……」

「私いいネタ持つてるんだけど……」

「え!?本当ですか!」

「うん。これはね…。」

「遅いな…美玲。」

「勉強会するって言ったのに〜！」

「まあ俺が教えてやるよ。」

「…今日坂本くんきてないね。」

「ああそうだな…。」

「二人ともどうしたんだろ…。」

「さあな…。でも変なことをしてたら止めないとな…。」

「うんそうだね…。」

秋山順子のコープレベル上がった！

2、リトライ

バトルの時一回だけ仲間を復活する（確率でだいたい50%）

品田龍辰のコープレベルが上がった！

2、ハイスコア

冴島が仲間にいる時経験値を2倍にする。

「ヤッホ〜！ごめん遅れた！」

「あれ冴島は？」

「来れないって。急に呼ばれたらしくて…。」

「そうか…でも仕方ないよなあ…。」

「急に呼ばれたなら…。」

「でもどうしたの？今日部活ないのに…。」

「ちよつと先生に呼ばれちゃって…それで時間かかっちゃった…。ごめんね…？」

「まあそれなら仕方ないかな…。」

「まあそうだね…。」

「じゃあ勉強するか。」

「じゃあ…。」

「お帰り。あいつらはもう次のステップに行きかけてんぞ。」

「なるほどね…。でも早くない？」

「うん。早いよな。」

「でも…：毎回やってたら早く終わるよな…。」

「しかないね…。」

「ただいま…。」

「お帰…：うわあ!？」

「めちやくそポロポロ！とりあえずシャワー浴びてこい！」

「……犯されるとは思わなかった……。」

「……物好きすぎるだろ……。……とりあえず入ってこい。」

「わかった……。」

「あつあの冴島さんが……！」

「と言いなから食べる美玲なのであつた……。」

「だつてご飯食べないと……。」

「……まあそうだな。……お前もお前で大変だったな……。」

「……その言葉は冴島さんに使つて。」

「はいはい……。」

「翔……。これでええんか？」

「ああつ……。いいぞ……。そいつら始末してくるから。」

「殺したらあかんぞ？」

「安心しろ……。死よりも恐怖を与えてやる。くっ！ハハハハハ！」

「……大丈夫か……？あれ。」

「多分大丈夫でしょ。」

ピロリン！

「おつとわたしか。」

ライン

『これでいいでしょうか…?』

新聞の写真（美玲がされたことを書かれてる。）

『うん！いいよ！後この噂もあるんだよ！』

冴島の噂も追加

『こんな噂も…!』

『ねえ…この人の噂を書いちゃおうか?』

『え?でつでも…。』

『いいんだよ…!書いちゃつて…!だつて…。真実を伝えないとね…。』

『あつても名前書いたらダメですよね…?』

『うん書いちゃダメだよ…。』

『これが…!愉悦!』

『ええそうよ…!是非愉悦部へ入ってください。』

『入ります!』

『やったく!』

終了

「どうしたんか?」

「いやなんでもないですよ。」

「そうなんか？嬉しそうやったが…。まさか…好きな奴ができ」

「いや男は無理なんで…。」

「何話してんだ…。」

「んこつちの話。んでおかえり〜！」

「一応写真は撮った。これをどうするかなんだが…。」

「安心しろ！ちゃんと頼りはある！」

「？…なるほどな…。さらつと勧誘してるのは気にしてないよ。」

「いいじゃないか…。面白いんだから！」

「なんの話や？」

「なんでもないですよ。」

「そうなんか？」

日記

4月9日

またか……。また始まったのか。

そういえば惣治郎が落としてたつていてたな……。なんで落としたんだ？

4月10日

くそやろうとあつた……！

杏と鈴木さんをいじめてた……！

だけど先生には会えた……。なぜか嬉しい……。

4月11日

パレスに入った……。この頃の俺は弱い……！竜司も守れない……。

モルガナを助けてなんとか脱出しそして家に帰りイゴールと会う。

……。なんか様子がおかしい……。ので聞いてみるとおかしな奴らが入ったということらしい……。

物語が変わってこれからも……。妙な期待はやめておこう……。どうせ倒せない。

4月12日

謎の女にあった。冴島美玲というらしい。竜司に聞いてみると同じクラスらしい。勉強は上らしい…。

心が…喜んでる？戦車のコープと愚者のコープ…力のコープを手に入れた。多分美玲さんだろう。

4月13日

何か張り出されていたがなんのことかさっぱりわからなかった。

球技大会…。知らない人がいるが美玲さんが「お兄ちゃん頑張れ〜！」と言っていたので兄なのだろう…。

三島に聞いて鴨志田が学校から追い出すと言った…さあ…！こつからが開始だ…！

4月14日

杏を追いかけてそして会話しそこで終了…。

モナがくるから寝た後やんないとな…。

4月15日

鈴木さんが飛び降りる日…。

確かに飛び降りたがパリーン！という音がなり隣を見たら美玲さんの兄だった。

「うおおー！」

と言って彼女を助けたのだ。

「お兄ちゃん！大丈夫!？」

「いつてて……！大丈夫やで〜！どっちも!」

「今行くぞ!」

……あれがイゴールが言っていたおかしなやつらか？

だが彼は骨折したらしい。竜司がそう言っていた。

杏が付いてきてそのままストーリーが進む。

そして恋愛と魔術師のコープを手に入れた

4月16日

チヨークを投げられたがかわした。もう上がらない魅了が上がった。

武器や回復を買おうと話してそのまま家に帰った。

武見に久しぶりに見たので懐かしい……。とおもってしまった

4月17日

竜司と一緒に買い物に行ったが……武器はもうあるので買わないでそのまま出た。

何か言っていたような気がするが……気のせいだろう。

机を片付けて怪盗道具を作れるようになった。

4月18日

とりあえずもう攻略はできるところまでは進めた。とりあえずすぐ鴨志田に予告状

を出そう。

4月19日

授業は正解した。予告状を出しそして鴨志田パレスを終わらせた…。

だが謎の男が脅しにきたというのはなかった…まさか美玲さんの兄なのだろうか…。とりあえず寝よう。

4月20日

法王のコープを入手した…。

前のことは覚えていないだろうけど…ありがとう。

4月21日

四軒茶屋までだけ外に出れるようになった…。サンドイッチを食べた後…。とりあえずバッテリーングセンターに行つてこのストレスを吹っ飛ばそうと思つたけど…。意外と汚れがついた服が多いので洗濯した…。これで金にはなるな…。

4月22日

焼きそばパンの情報を手に入れたので早速買いに行こうとする。そしたら美玲さんに会いコープが発展したが冴さんのようにまだわからないようだ…。結局焼きそばパンはゲットできなかつた…。

4月23日

授業を受けたが後ろの人が問題をわからないようなので後ろに問題の答えを書いた紙を飛ばし助けた。

あとで感謝されお礼に焼きそばパンをもらった。……美味しかった。

4月24日

パーティ缶セットがテレビショッピングで売られていたが買わなくていいか…。

外で美玲さんの兄と美玲さんにあつた。兄の方が警戒していたようだが同じ高校だと知ると

「警戒してすまんかった…。俺の名前は冴島大河や。こっちは…もう知ってるようやな

…。俺の妹や。」

「ヤッホー。」

どうしたのか聞くと

「病院帰りなんだ。ついでに材料買って来いって言われて…。」

「まあ…治るのは早すぎる…と思うやけど骨折じゃないんや…。」

「噂が変な方向にいつちやって…。でも少し怖いから家に待機させてたの。」

そうなのか…。というと

「あ！急がないと！」

「そないに急がなくてええやろ。じゃあな。」

……コピーはなかった。俺には関係ないのかも……。

4月25日

通学中に本が読めるようになったので惣治郎さんのやっている店の情報がある本を読んだ……。

やっぱり内容が同じだな……。授業は普通に正解した。

4月26日

この日記も21回目……。めんどくなってきたけど仕方なく書いている……。というより書いてないと落ち着かない……。

4月27日

この日の問題も正解。クロスワードが家に置いてあったのでまたやってみる……。簡単に解けてしまったのでつまらない……。

4月28日

美玲さんにあった。彼女のことを聞いてみると

- ・三年生の問題をテスト中はやるため辛い。
- ・保健体育が苦手。(昔生々しいものを見せられて苦手になったらしい)
- ・兄と知り合いの3人暮らしらしい(親は他界し知り合いに預けてもらっているらしい)。

・今はパソコン部に入っており先輩が心配らしい。

ということがわかった……。けどおかしなやつらの様子ではない……。また新しくイベントでも入れたのか？

4月29日

テレビで元祖探偵王子の話をしていた……。今は明智だ……。あいつを何度も助けられない……。ない……。

なぜ助けられないのだろうか……。

4月30日

授業は正解した。流石に慣れてきた。

コープを進めていき美玲さんには会わなかった。

5月1日

鴨志田がいなくなるのが明日だ。みんな心配していたが大丈夫だというと安心したようだ。

帰りに冴島さんが話しかけてきた三島を知らないか聞いてきたのでクラスの中にいるのでは？と聞くとありがとうといいい上あがっていった。

……期待しても意味はないのに期待してしまうのはなぜだろう。

5月2日

鴨志田が改心した。これで助かった。三島たちに話しかけられ教室に戻る。

バレー部は少しの間休みになるようだ。……う？なぜか三島の怪我が増えている？あとさつき冴島さんも怪我をしていた…。

何かあったのだろうか。……放課後になり話しかけられたので怪我のことを聞こうと思つたが竜司が聞いた。

「ああこれ暴力だよ。」

「え？あの鴨志田やろうか？」

「いや違う人。3年だよ。俺と冴島さんが呼び出されて暴力を振るつたんだ。」

「だから怪我を…。」

「……でもあの人たちいなくなるかもね。」

なぜ？と聞くと。

「最近そういうのは朝に貼り付けられるんだよ。それで退学…。そういうのがあるんだ。犯人がわかってないから愉快犯かそれとも…怪盗団みたいに正義だと思ってるんだと思う。」

「……そうなのか。」

そういえば貼られてたな。訳がわからなかったがそういうことだったのか。…あの人たちがいるようになってから違うことが起きている…。

まあどうせ無理なんだ。あいつには…俺には勝てないんだ。

流石に本気を出さないと勝てない…。 by 翔

「ここは訓練ルーム。ふつうに改造してる。意外に大きい普通の家にはないよね…。

「ふむ…。」

「どうしたの？」

「いや俺と戦って見ないか？」

「え？いやだ。」

「何話してるんや？」

「いや戦って見ないかって言ったら断られたんだ。」

「まあええんやない？」

「絶対負けるって…。」

「まあやってみないとわからないやろ。」

「そういうと思ったぜ！さて行くか…。あつその前に回復しないな。ほれ！」

「さて行くで！」

「さてそつちからいいぞ。」

「じゃあ行くよ。きて！ルシフェル！楽園！」物理と魔法反射（解除不可）3回まで。 1

ターン)

「いくで！白虎！氷の世界！」絶対に当たる。

「寒いしイツテエ…。こい！アンリマユ！リベンジ！」さっきのダメージ反射。

だがそれは反射した！

「ぐっ!?忘れてた…。」

「よし…！イーノック！知恵の実！」全体に攻撃力アップと防御力アップと素早さアップとチャージかコンセントレイト（魔法が高かったらコンセントレイト。物理が強かったらチャージ）

「こいや！白虎！デスクロウ！」確率で即死

「甘い！こい！モイラ！運命の世界！」確率で即死か体力1。当たらなければどうってことない

「甘い！」

「ちい！」

「チツ！冴島さんだけか…。」

「きて！death！終結の世界！」精神的ダメージ(MP0)あたらなくても絶対に減る。

「あつ。…やつべえ！」

「吹っ飛ばやー!」(冴島さんの武器は敵がMPがないほど攻撃力が上がるし自分がHPな
ければいけないほど攻撃力が上がる。あと…今は素早さアップしている。素早さが上がる
↓命中力が上がる。この武器は50ぐらいないと

絶対に当たらない。冴島さんの今の命中力は59ということは死あるのみである。

(回避すれば希望はあるが…)

「グハア!?!ひつきようだろ!それ!」

「勝てばよかろうなのだ!」

「よっしゃ!」

「クツソオ…。なんでだよ。いけると思ったのに…。」

「冴島さんに即死が来たらやばかった。」

「でも復活するでこれで。」

未来を見るために

体力1で生き残る。

「…:どつちでも負けてたんじゃね?」

「いや…。回避があつたら死んでた。」

「…普通に舐めてたわ…。」

神のコープが5に上がった。

魔力ブースト

美玲と冴島さんと翔たち（怪盗団たちはなし。）が使える。

絶対に攻撃は当たるとし攻撃力アップとチャージ、コンセントレイトどっちも（魔法、物理のスキルを使うまで消費なし。）

だけど自分に半分のダメージがいく。

「全く…本気出して戦えばよかった。」

「私たちが初っ端から死ぬわ。」

「……まあそこは頑張れ。」

「動いたから腹減ったわ。今日のご飯はなんや？」

「今日はステーキといこう。」

「やった！ステーキ！」

（まあどうせ戦うことになるし…。その時に本気出すか。……その頃はもう強くなってらるだろうけど。）

「翔早く〜！」

「今行く！」

「……ここだよね？」

「ええ……。でもなんで俺たちなんでしょうか……。」

「なんかわからないけど声聞こえたから夢かと思ったよ。」

「俺もですね……。全く……。なんでこうなったんだろう……？」

「さあね。とりあえずチャイムを鳴らそう。」

「そうですね。」

「よしできたぞ。」

「あれ？5個？」

「ああ……。そういえば言っけなかつたな……。実はここの神に増援送るねって言われて送られてきたんだよ……。」

「……なんか大変ね。」

「ほんとに過労死しそうな気がするんやけど……。」

「あんしんしろ！もうなれた！」

「今は人間なんだからちゃんど健康とかは気にしなさいよ。」

ピンポン！

「来たみたいだな。冴島さん行ってきてくれ。俺ご飯よそってくる。」

「わかったわ。はーい。」

「……なんか不安なんだけど……。」

「たしかに……わかるかな……？」

「おう……。……誰かわからん。」

「ほらやつぱり……。。」

「とりあえず上がれや。」

「お邪魔します。」

「お邪魔します。」

「秋山さんと品田さんか。」

「………。美玲ちゃんにはバレた。」

「ある意味すごい。」

「まあ私はどつちも見たことあるから。」

「そうやったんか……すまんかったな。」

「いやいいですよ。しかたないし……。」

「とりあえずご飯食って話すぞ。」

「はい……。……お腹空いてたから助かるね。」

「というより……誰？」

「……それもあとで言うよ。」

「それで？どうして品田さんたちがいるの？」

「…ここの神が連れてきた。」

「え？」

「俺嫌だつて言ったのに…連れてきやがった…！俺神嫌いがさらに加速するってどゆこと？」

「…まあ了承したのはこつちだし…。」

「おまけに美玲さんたちがいるって聞いたらいかないと…。」

「…優しさが仇になったか…。」

「…でもなんで2人なんや？」

「一気には遅れないらしい…。もう一気に送ってくれた方が助かる。」

「でもなんで来るってわかったの？」

「一応聞かされてたのはあるけど…。あとはこいつのおかげだな。」

『どや!!』

「なるほどね…。普通に教えてくれ…。」

『めんごめんご。』

「なんかイラつとくるね。」

「俺もだけどやめてあげて。」

「鉄パイプは持つてるんだ…。」

「うん。…流石にバットは持つていけないからね。」

「持つてきたらよかったのに…。」

「買えばいいかなって。」

「バイトするの？」

「まあね。一応…働くのは…できるからね。」

「お腹すいてなければでしょ？」

「…普通にお腹すいたらダメになるところですよ！」

「4日ぐらい耐えられる。」

「いやなんで!?普通に耐えちゃダメだよ!?!」

「…昔そんなのもつぱらだし…。」

「…あつごめんなさい。」

「俺もだけどね…。まあ流石に2日ぐらいだけ。」

「よく聞くのは寒いから寒いからって軽犯罪をやつて刑務所に入つて春ぐらいに出るのは聞くわ…。」

「だから変人が多いのか。」

（場所によつては違うので勘違いしないでください。あとこれは友達の憶測を聞いただけ）

けです。)

「でも意外と多いみたいですよね。」

「谷村さんが言ってましたね。」

「…:…寒さ凌げるからって…。」

「入るか? 普通…:?’」

「人ってやっぱりわからない…。」

続くー

日記2

5月3日

なんか転校生が来るらしい…。

流石に生徒が少なくなってきたのか先生たちはやばいんだろう。

流石に生徒が口出しできるのはいないだろう。くるのはテストが終わって4日後だ。

5月4日

岩井から本物に近いモデルガンをもらった…。懐かしいと思ったのは俺だけなんだろうな…。

とりあえずお宝を売り家に着いた…。明日は怪盗団の名前を決める日だ。どうしようか…。

5月5日

やっぱりここは慣れない…。そうじろうさんのご飯の方が美味しい。

怪盗団の名前は『夢に終止符を』にした。……この夢はいつ終わるんだ…。

5月6日

警察官がきた。三島がきてコミュ開放した。夜になりそうじろうさんが夜出かけて

いいと言われた。

なので岩井の元に行き銃の話をし家に帰った。

5月7日

メメントスに行きを今できる全てのミッション終わらせた…。やっぱり先生が早くきて欲しい…。

5月8日

とりあえずバイトは牛井屋で働くことにした。

…三島のコミュが2に上がった。

5月9日

花粉注意報が来ているからメメントスに行った。流石にまだ先生のが終わっていないからキツイな…。

5月10日

花粉注意報が来ているが今日は流石にメメントスはやめておこう。

竜司と一緒に勉強会をした。

5月11日～13日まで記入なし。

5月14日

テストが終わり美玲さんに呼ばれた。話によると先生が変なことをしてくるのでそ

の瞬間を

捉えたいのだとか。無理やりお願いされてしまったのでなにか使えるものを揃えよう。先生に呼び出されたら俺の方に連絡が行くようになった。連絡先がないのでライン交換をした。

……とりあえず岩井さんのところに行こう。

「はあ？なんでんなことしてんだ。」

当然断られたがカリスマ力と溢れる知識で説得した。

「はあ…仕方ねえな。これやるよ。」

説明すると防犯カメラのようなもので声も録音でき警察に出せば一発だろう。と
いったものの…。

「スマホでもいいんじゃないか？」

「馬鹿か？スマホだとバレるだろ。あれは固定するのに時間がかかるしそれが倒れたら壊されるてやられるがオチだ。だからこれでいいんだよ。スマホよりも小せえし意外と使えるだろう。」

…これどこにおこうかな…。

「一応言っておくがこれは誰からもらったか言うんじゃないぞ。言ったら契約は破棄だ。」

「わかってる。」

ライン

「なるほど…。それを使えばあの先生も一撃必殺ってことね！」

「だけどデータはどうするんだ？」

「スマホに移せばいいんじゃないかな。なんんもなければいけると思うよ。」

「そうか。じゃあ連絡来たら言ってくれ。」

「うん。急にくるだろうから覚悟しといてね。」

「ああ。」

ライン終了

「なんだ？これ。」

「それは触ったらダメだ。」

「なんでだ？」

「大事なものなんだ。」

「…わかった。でもこれなんかあつた時に使えるかもな…。」

さすがモルガナいいところをつく。

「そういう潜入道具はないのか？」

「うゝむ…考えたことなかったな…。今度考えてみるか…。」

そう言つてモルガナは寝た。

……とりあえず。……これにでも入れよう。上に置いといて……。これならバレないし大丈夫だろう。

裏切られた者達の話

裏切られた者の話 8・戦車編

俺は何度目か分からない時を過ごしている。

2年の四月から始まりそして3月の最後に終わるか11月に終わるか………。それがわからない。

俺はこれを知りたかったけど俺が死んだりしたらなぜかその日に戻ってそして警告文が出る。

『あなたは必要な人です。死なないでください。』と言った文だ。

は！何があなたは必要な人だ！何度も春のお父さんを死なせて！

一回俺はこれが原因かわからないがパレスができた。全員が仲間になった時だ。一度裏切りってどんな気分かシリタカツタンダ。

明智が裏切つてあんなに怒ったけどもうそれはもう飽きた。何度も何度も同じことを言ってもうアキタンダ。

裏切つたらみんなどんな顔するかな！ああ楽しみだ！

そして結果はみんな絶望したり驚いたりしてた！いやあいつ（裏切り者）だけはだけ

は真顔だった。

イラつく！イラつく！イラつくイラつくイラつくイラつくイラつくイラつくイラつくイラつく

イラつくイラつくイラつくイラつくイラつくイラつくイラつくイラつくイラつくイラつくイラつくイラつく

くそ！あれでも明智は笑ってたような？まさか………

俺は倒されて俺は死を選んだがパレスができる前に戻った。けどどちよつとわかったことがあった。

明智は俺と同じではないのかと。そして今回はいい方で終わった。

で次の日やっぱり4月だ。明智に会うまで耐えないと。

そして例のパンケーキ事件が起きた！そして俺は友達がファンだということではたら連絡番号をもらった。

なぜか杏にも欲しいと言われた。まあいいかと思えばけた。

あいつの連絡番号だ。早速あいつ（最低！）と杏と別れたあと明智に連絡してみた。

明智「もしもし。ああきみか。」

竜司「……やっぱり俺のこと覚えてるんだな。」

明智「ああせつかく演じてたのに君が変なことが起こすからだよ。」

竜司「お前の気持ちを知りたくてな。ついやっちゃたんだ。

まあでもお前の気持ちがいやってほどわかったよ！まあ俺も楽しかったしまあいいや。」

明智「へえそうなんだ。で今回はパレスは？」

竜司「はあないよ。もう一回やってやろうと思ったのに。」

明智「ねえじゃあ演じない？裏切り者を。」

竜司「え？」

明智「ああそうだ実はあいつが記憶持ちだったんだ。それでまあそれは放置していただいだけだね。」

竜司君があんなことやっちゃってさ！だから一緒にやってみないか誘ってくれて言われたんだ。」

竜司「ふーん。で？それでなんて言ったんだ？」

明智「返事次第って返したよ。でどうするの？」

竜司「やるに決まってるだろ？でも俺たちだ圧倒的に勝てない。どうするか……。」

明智「ちよつとついてきて欲しいところがあるんだけどいい？」

竜司「ああいいぜ。日曜日は絶対予定入れないようにするな。」

明智「わかった。ビックバンでね。」

竜司「ああわかった。」

これは正解だったな。

選んであれもやつても悪くなかったってことだ。

まあ日曜日を楽しく待とう。

杏「竜司。」

なぜか杏に呼ばれた。どうしたんだ？

竜司「どうした杏。」

杏「ええくとなんか嬉しそうだなって！思つて。」

竜司「あつわかったか？あははは俺は日曜日靴を買いに行くんだよ！それで嬉しくてな！」

杏「あつそう。あつえつとありがとう。竜司！」

竜司「あつああ。」

どうしたんだ本当に。そういえばなんで杏は明智の電話番号を？まあいいや。

そして今日はいいつ（〇〇ばいいのに）が話してきた。俺はいいつ（なんで？）が何考えているかわからない。

そしてあつという間に日曜日になった。そういえばあいつ有名人だけど大丈夫なのか？

まあそれは気にしない。

明智「竜司君。」

竜司「よ！どうしたんだ？」

明智「あつそれは」ピコリン！

竜司「あつすまねえ。」

ライン

明智「僕のことレイって呼んでくれないかい？」

ライン終了

竜司「ごめんごめん。友達からだったわ。でレイ？何の用だ。」

明智「ああ紹介したい子がいてね。竜司君は驚くだろうね。」

竜司「？」

??「おい！双葉待て！」

??「遅いぞ！そうじろう！」

竜司「まさか。」

明智「そのまさかだよ。さ早く行こう。」

ありがとうございます！

双葉「あつレイ！と竜司？」

竜司「……………ああ久しぶりだな。」

双葉「おお。久しぶりだな！竜司！」

竜司「なあ場所うつそうぜ。」

そうじろう「！あそこなんてどうだ？」

竜司「あそこ？」

双葉「あそこってどこだ？」

双葉「まさか私の部屋とは。まあ掃除したからいいんだけどな！」

明智「本当にきれいだね。でいつから思い出してたんだい？」

双葉「竜司がパレス作った頃には思い出してた。」

竜司「俺は……………何度目か思い出せない。何度目なんだっけ。俺は。でもこれだけは覚えてる。

みんなが笑顔で終わった次の時には覚えてた。多分2度目ぐらい。

明智「僕は多分3度目ぐらいだね。君の異変に気づけたからね。」

そうじろう「俺は多分双葉が思い出した頃には覚えてたと思う。」

明智「そっか。で竜司がなんであんなことをしたかだけ……………」ピンポン！

双葉「ん？今日は何も頼んでもないんだがそうじろう頼んだ。」

そうじろう「はいはい行つてくるな。……………はいはい誰です……………なんでお前らが！
……………まあとりあえず入りな。」

竜司「……………？」

杏「ヤッホー双葉ちゃん！あと明智久しぶり！いや前ぶり！」

春「久しぶり。竜司君と明智君と双葉ちゃん。」

明智「まさか君たちとは……………面白ね。」

そうじろう「はあなんでこんなことに。」

春「ふふふまあいいじゃないですか。」

杏「そうだね。……………で竜司話したいことがあるんだけど。」

竜司「そうじろうさんは店に戻つてください。仲間（俺は入っているのか？）と話したいので。」

そうじろう「ああわかった。」

竜司「で？どうしたんだ。俺に何の用か？」

杏「何の用か？じゃないわよ！なんであんなことしたのよ！」

竜司「明智の気持ちを知りたかったけど。」

明智「それ嘘じゃないの？」

竜司「ほんとだよ。なんでそんなこと言うんだ？」

明智「いやほんとなのかなあ〜？って思っただけだよ。」

竜司「へえ〜そうなんだ。」

春「なんでそんなに泣きそんな顔なの？」

竜司「泣かないさ。もう……泣かないさ。」

裏切り者は泣いてはいけけない。泣いたら仮面が剥がれてしまう。何度目かわからないもので作った仮面が壊れてしまう。

双葉「なんでそんなこと言うんだ!？」

竜司「なんだっていいだろ。」

俺は大丈夫。オレは大丈夫。オレハ大丈夫。オレハ大丈夫。オレハ大丈夫。オレハ大丈夫。オレハ大丈夫。オレハ大丈夫。オレハ大丈夫。

またあんなことはしない。またあんなことはしない。パレスが発見されました。

嘘だ!嘘だ嘘だ!嘘だ嘘だ嘘だ!嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ!!!

竜司「あ!?!ああああああああ!」

杏「あつ竜司!」

俺?????
外

俺はあいつらの仲間じゃない!

俺は!俺は!俺は一体?誰なんだ?

俺と言う存在さえなければ.....ああそうか!わかった!

俺が死ねば.....!!!!

杏「竜司!」

竜司「近づかないでくれ!俺は!もういらなんだ!」

春「竜司君!」

双葉「そうじろう!」

ああ助けを呼んだか!そしたら早く死なないと!

明智「待つてよそれが君が選んだのかい?」

竜司「ああそうさ!俺が選んだ!俺が選んで!あいつさえ巻き込めればよかったんだ

!だけどお前らまで来て!ちくしょう!!!

オレハモウコワレタニンギョウダ。モウイラナインダヨ!

(俺はもう壊れた人形だ。もういらなんだよ!)

明智「っ!君はそれを選んだんだね。こうなつたら僕も考えがあるよ。」

オレガミエタノハジメンデモアカイロデモナクアケチだった。(俺が見えたのは地面

でも赤色でもなく明智だった。）

そして俺は倒れた。

所持品 ナイフ スマホ 睡眠薬

竜司「うっここは？」

明智「ああ起きたかい？」

竜司「！明智!?なんで！あとここは。俺は死んだんじや！」

明智「残念ながら死んでないよ。俺がその寸前で止めたんだ。」

竜司「なんで止めるんだよ。俺はもう壊れたものだぞ？意味わかってるのか？」

壊れたものについて

壊れたものは修復可能ですがそれを治すには時間がかかります。

ですが修復する者がいれば簡単に

(このデータは削除されました)

明智「大丈夫だよ。そうじろうさんが修復するものだったんだ。」

竜司「お前は？」

明智「前までは壊れた者だったものさ。でもなぜかあいつが修復するものでね。はあああ。こつちが困ったよ。」

竜司「そうか。……………俺はどうしたらいいんだろうな。裏切っ

たんだからもうあいつらとは」

明智「そうなんだってみんな。」

杏「そんなこと考えてたなんてバカね竜司。」

春「そうだよなんて言ってくれなかったの!?!言ってくれば相談に乗ったのに。」

双葉「わたつわたしだって相談に乗るぞ!」

そうじろう「記憶がなかったから聞いてねえかもしれなかったけど俺でもそれぐらいはなんか言うさ。」

竜司「みんな!うつあつうわああああん!」

明智「ふふふ泣いていいんだよ。みんなちゃんといるから。」

竜司「おれっ!俺!うわああああん!」

ちゃんと仲間はいた。俺だけがはぶられることもない。

明智「落ち着いたかい?」

竜司「……ああ落ち着いた。こんなみつともねえ姿見せて……悪いな。」

杏「それぐらいいいんだよ!だって仲間じゃん!」

竜司「ああそうだな。」

明智「……いま聞くべきじゃないと思うんだけどまさか手とか切つてないかい?」

竜司「!……それはすまねえ。それは言えないんだ。」

明智「そうかい。じゃあ言える時になったら話してくれる。」

竜司「ああ。」

杏「で。どうするの。あの子。」

春「とりあえず様子見をしたらいんじやない？」

明智「たしかに竜司君が監視係だもんね。」

竜司「まだ参加するって言ってるねえぞ。」

杏「どう言うこと？」

竜司「実は……………」

みんなに話した。さてどうなるか。

杏「そんなことがあったんだわたしが明智と話前に……………」

春「……………それでどうするの？竜司君は。」

竜司「俺は……………明智側に行こうと思う。」

そうじろう『そうか。お前さんはそっちを選んだんだな。』

竜司「！そうじろうさん？」

そうじろう「ん？どうしたんだ？」

竜司「いやなんでもありません。それで俺はあいつ（もう消えれば？）を監視すればいい

のか。」

明智「うん。そうだよ。そしてあいつがこっちのパレスにきた時に敵になればいいんだ。」

竜司「なるほど。でも俺風弱点だぞ？モナとかきたら……………」

明智「それは大丈夫僕が毎回やってるあれでなんとか防げる。」

杏「そんなことでしたんだ……………。ねえわたしもそっちに行ってもいい？」

明智、竜司「え？」

杏「だつて回復しないじゃない。そしたらジリ貧よ。」

竜司「それもそうだけ……………。でも春がきたらこっち確実に死ぬな。」

春「なんで？」

竜司「そのなんか全部のステータスアップするやつ」

春「ああそれね。でもあれ1人だけだよ。」

竜司「何言ってるんだよ。もしもあいつ（なんでいるの？）についてチャージをやられて全体攻撃……………」

明智「大丈夫。僕はランダマイザ持ってるから。」

竜司「でも一番の脅威は……………真とモナだよなあ。」

真「呼んだかしら？」

モナ「誰が脅威だつて？」

竜司「うお！びっくりした。」

真「何が恐怖なのかしら？」

竜司「嫌だつてモナは復活技持つてるしあと全回復と状態異常直すやつあるし…それに真も全体回復持つてるし。」

真「まあそうね。」

モナ「まあそうだな。」

竜司「あと道具とか怖いし。」

そうじろう「撃ち落せばいんじゃないか？」

明智「そんなことできませんよ。できたらないいなあ〜と思うぐらいですね。」

双葉「それならいいところあるぞ！明智！明日秋葉原な！」

明智「あつああ。わかったよ。」

竜司「……………」

俺はこれで大丈夫なのだろうか。

その明日になって俺はまだまだ病院にいないといけならしい。プリントとかは杏が届けるらしい。

あとここは鈴井がいるところらしい。たまに鈴井が来て楽しく話している。1
そんなある日鈴井が話したいことがあるらしい。

竜司「どうしたんだ？ 鈴井。」

鈴井「実は私何度もループしてる気がするの。」

竜司「それでどうしたの？」

鈴井「それでね今回はここを離れないようにするの。親の都合があらうと。」

竜司「そうか。じゃあバイトとかしたほうがいいんじゃないか？」

鈴井「そうだね。」

竜司「！そうだね俺の部屋の隣のところ空いてるかも知れねえ！そこにくればいいんじゃないか？」

鈴井「え？ いいの？」

竜司「空いてるかわからねえけどな！ちゃんと親の了承とつとけよ！」

鈴井「うん！」 世界《サタナエル》

竜司（みんなだんだん思い出してる。じゃあ三島も？ 杏に頼んで呼んでもらおう。）
と思つたらあつちから来た。何で知ってるん？

三島「ねつねえ坂本くんちよつと話聞いてもらつてもいい？」

竜司「なんだ。」

三島「あのここなんでも現実になることがあつてね。それでね。僕思つたんだ。同じことが毎回起きてるんじゃないかって。」

竜司「どうしたんだ。」

三島「ちよつと聞いてみたいんだけど何度も体験してるんじゃないかってだってその夢と同じ通りにターゲット取ってて！」

竜司「じゃあ次のターゲットは。」

三島「待つて。えゝつと今金田が終わって。確か双葉ちやんだっけ？」

竜司「へえそうなんだ。俺は記憶とか持つてないからわからないわ。」

三島「えつても」

竜司「俺は何も知らないんだ。杏とかならわかるんじゃないか？俺バカだからよ。」

三島「わつわかった。」

はあ。三島も思い出してた。だけど俺たちのことをバラされるのは厄介だ。杏に連絡しとくか。

ライン

竜司「杏話したいことがあるんだが今いいか？」

杏「うんいいよ。」

竜司「三島と鈴井が記憶を取り戻してる。三島が変なこと喋らないように言つといてくれ。」

杏「それは竜司が言えば？」

竜司「俺記憶がない設定にしたから無理。」

杏「そっか。じゃあ言っとくね。」

竜司「俺のことは言わないでくれよ。」

杏「わかってるって！」

ライン終了

竜司（はあ。あいつも思い出してんのかな？……………祐介も今頃はあいつと一緒になんかやっつてんだろうな。」

祐介「呼んだか？」

顔一杯にイケメン顔が！

竜司「うお！ってなんだ祐介かどうしたんだよ。」

祐介「ふむ。なんか言っていてな。幽霊でもいるのかと思ってさっきから声をかけていたのだが……………」

竜司「すまねえ！気づかなかった。考えこととしててさ。いつ退院できるのかなって？」

祐介「明日と杏が言っていた。」

竜司「そうか。ありがとうな。祐介。」

祐介「ああそれぐらいどうってことない。」

竜司「どうしたんだ祐介。」

祐介「ああそうだ。これを渡しにきたんだ。（その名前は削除されました）も心配してな。」

竜司「!そうか。ありがとうな。」

祐介「なんで入院したんだ？」

竜司「ん〜。俺は聞いてねえからわからねえや。杏とかなら知ってると思うぞ。」

祐介「そうか。確かに知っていそうだな。あとは……真か？」

竜司「ああ真もきたしな。その2人にきいてみるよ。」

祐介「わかった。じゃあな。」

竜司「ああわかった。」

………祐介は思い出しているかあまりわからないな。あいつ変人だからわかりにくい。

ちよつとまとめてみるか。俺は2度目明智は3度目で………双葉たちは……あつくそ!家に置いてあるんだった!

それで確かめるか。いやいつそお袋に………いややめておこう。

それで今覚えてる奴らは鈴井、三島だな。俺が知っている限りでは。

まずはやっぱり明智情報を載せてわざと俺と明智が繋がってるのを双葉にバレたつ

てことにしよう。そして

そうじろう「おい！竜司！」

竜司「うわあ！なっなんだ。そうじろうさんか。」

そうじろう「お前さん考え事は一旦やめとけ。」

竜司「はい。そうします。でどうしたんすか？」

そうじろう「ああそうだききたいことがあつてな。」

竜司「？何ですか？」

そうじろう「俺が神様だつて言ったら信じるか？」

竜司「え？まつさかあそんなわけ！」

そうじろう「まあそう思うなら思つとけ。まあいまは乗り移つてるだけなんだけどな。」

竜司「はっはあ。」

そうじろう「まあそれは置いといて。実は俺の知り合いにそういうのを直すやつがいてな。」

竜司「え!？」

そうじろう「まあそれで。だ。まずはそいつにここがやばいところだつてことを伝えたんだが……。」

「そこ一回おわんないときついみたい。すまない。本当に。こっちだつて入りたいんだが……その何故か入れなくてな。」

だからその記憶持ちの人たちには悪いが辛い体験をするだろうけど一回だけ耐えてくれ！」

そうじろう「だ。そうだ。俺だつてびつくりしたんだ。あいつが解けるもんは一つもないと思つていたからな。」

竜司「じゃあその人が来れば！」

そうじろう「多分この世界は直つて普通にお前さんが20歳25歳とだんだん年を取れるだろうよ。」

竜司「そうなんですか。じゃあそれをみんなには……。」

そうじろう「だめだ。俺のことは言つてもいけない。いいな。」

竜司「はいわかりました。」

そうじろう「じゃあな。あとすまないな。」

竜司「え？」

なぜかそうじろうさんはそこからいなくなつたようになっていた。

そしてみんなはだんだん明智とあいつがいるところ近づいた。

それで俺が言った作戦が行われ俺はそのパレスに逃げわざとちよくちよく姿を現し

ては雑魚敵を置いて逃げるといふ戦法をやった。

そして明智と戦うところにやってきた。」

明智「ハハハハハ！最高にハイってやつだ！」

それ違うゲームかアニメ！

竜司「すげえ！この力さえあればお前をお前らをぶつ倒せる！」

そこからは総力戦だ。そういえば俺が何でこんなことやったかという理由（偽）はお前が羨ましいから仲間にもみんなにも愛され……………。

ということにしといた。俺はそんなこと思っていないんだが……………。

であつちのメンバーはモナ、杏、真だった。メンバーはもう変えることが可能らしい。

まず率先してやったのはモナ。復活がうざいからな。

モナ「ふグウ！やられたぜ。」

名前は削除されました「く！モナ！」パン！

明智「おつとさせないよ。そんなの使つて戦線復帰されたら嫌だからね。」

そして次は誠を狙った。と思わせといふ案を狙った。タルンダがうざかった。

杏「つ！やられた！」

名前は削除されました「くそ！杏！」パン！

竜司「だからさせねえって言ってんだろ！」

俺も明智に教えてもらったんだ。めっちゃ楽。だってあいつ回復系アイテムだけでやってたからな。

それで残りは2人真は眠らせておいた。

竜司「これでフィニッシュだ！」

これであいつを倒した……。だがその瞬間パン！という音がなり俺が後ろを向くと………明智が死んでいた。

竜司「な！」

名前は削除されました「ハハハハハ！なんだつまんない。」

竜司「てめえ！どういうつもりだ！」

名前は削除されました「は？どういうつもりって元通りに戻してるだけだよだって明智は死にそして君は怒るんだ。」

竜司「は？何言ってるんだ？」

名前は削除されました「君は本当にバカだなあ。その脳がない頭ですつと考えてなよ。ああそうだ。俺の名は……いや俺の名は……」

そしてそいつは俺に近づき名前を言った。

「世界《サタナエル》だ。」

ああそうかこいつは………

パン！

人間じゃなくて神様だったのだ……………。

そして次の時そうじろーさんが言っていたと思われる人たちが来た。
冴島大河、冴島美玲。

そして神咲翔。この人たちが世界を救ってくれることを俺は願う。

裏切られたものの保護者と??の話

5・法王編 前編

俺は誰かに乗っ取られているらしい。名前はえーとなんだっけ。

まあどうでも

??「よくないよ！あと俺の名は黄龍！」

ああそうだった黄龍さんだったな。俺は何度目を体験しているんだ？

黄龍「えくとね18回目！なんでそんなことを彼はするんだろうね。」

お前さんならわかるだろ。

黄龍「知らないよ！」

まあとりあえず今は黄龍というやつと一緒にいる。ん？俺が何度目からこいつとい
たかつて？

なんと……1回目だ。びっくりしただろ。まあそっちの方が驚くだろうな。

で今は11月20日あいつが警察に行って取り調べを受けているらしい。

そんなときに何か起きたらしい。

黄龍「ん？なにこれ!?こんななかつたのに!?!

おいおいどうしたんだ。

黄龍「えっと坂本君がパレスを作ったんだ。まさか記憶覚えてるのかも!?」
パレスとやらは知らんが……坂本の様子ぐらい見に行くか……。

黄龍「うゝん。まあそれぐらいならいいかな。じゃあレッツラゴー!」
なんかハイテンションだな。

黄龍「こんくらい高くないとやってられないよ!」

そうか。俺も少しはテンションあげるか。

黄龍「そうそうそのいきだよ!」

まあ家なんかわからないから黄龍に教えてもらった。まあなんか理由はなんか高巻さんが心配してたんだが大丈夫かとかいいだろ。

竜司の家の前

ピンポン!

竜司の?「竜司!あつすいません。私の息子かと思つて。それで何の用です?」

惣治郎「ああ。高巻さんから家を教えてもらつてな。俺の娘と仲良くしててな。それでおたくの息子さんからラインが来ないとか

言いやがるからそれで来たんだが……。

竜司の母「ああそれで来たのですか。すいません今息子はいなくて……そと出てくるつて言つてから帰つてこなくて……。」

惣治郎「そうなのか。すいません。こんなときに。」

竜司の母「いや大丈夫です。なんかわかったら連絡してください！これ電話番号です！」

惣治郎「ああありがとうございます。」

竜司の母「それでは。」

惣治郎「ああ。」

居ない？どういうことだ？

黄龍「まさかパレスの中にいるのかも!?!」

そのパレスとやらがわからねえからな俺は。

黄龍「まあそれぐらいならなんとかなるよ!」

そうなんだ。じゃあ双葉にちよつと言ってみるか。

黄龍「え!?!だめだよ!」

だって怪盗団の仕事だろ？ちよつと言つとくぐらいだから大丈夫だ。

そして俺は帰った。

佐倉家

双葉「なあなあ惣治郎。」

惣治郎「なんだ。」

双葉「最近というよりさつきからラインが返って来ないんだ。」

惣治郎「誰からだ？」

双葉「竜司から。みんな心配してて……惣治郎！竜司の家に行ってくれないか！」

惣治郎「……行つたよ。そしたらなんて返ってきたと思う？いま竜司は家に帰ってきてないだそうさ。」

双葉「なんで惣治郎が竜司の家を知ってるんだ!？」

惣治郎「なんでつてそりや俺の住所つすつて言つて渡してきたからな。いまはルブランにあるけども。」

双葉「そうか。みんなに連絡してみる！」

はあやれやれめんどくせえことになったもんだ。だけど記憶持ちってなんだ？

黄龍「記憶持ちつてのはね。この何度かループしてるのを完全に覚えてる人のことさ。貴方とかも入るよ。」

へえそうなんだ。とそんなことを聞いていたら双葉が戻ってきた。

双葉「たつ大変だ！」

惣治郎「どうしたんだ？」

双葉「竜司が！竜司が！竜司が怪盗団の敵なっちゃったよ……。」

惣治郎「!?どういふことだ？」

双葉「このことをみんなに伝えたらなんか竜司から返信がきてそれでなんかわからない暗号だったんだがそれを明智が

こういうことじゃないって言って書いて文章が「俺はパレスにいるしかも俺が作ったパレスにだ。」って!」

惣治郎「一回落ち着け! 深呼吸して!」

双葉「スーハースーハー! なっなんか落ち着いたぞ。それでパレスの検索できるやつがあるんだが検索したら見つかったんだ

竜司のパレスが! どうしよう! どうしよう私!!」

惣治郎「わかったから落ち着けまずはいつの帰りを待つんじゃないのか?」

双葉「あつああそうだ! 待たないとな!」

ほ! 戻ってくれてよかったぜ。でもなんでできたんだ?

黄龍「多分彼に対して悪い気持ちになったんだと思う。多分自分がペルソナ持ちだからそれで気づいたんだと思う。」

なるほど……なあお前ってなんなの?

黄龍「俺はお前お前は俺! だよ!」

へえ。じゃあペルソナってやつ俺もできんのか?

黄龍「うんできるよでも自分だって認めないと……。」

………そうか。その認めるやつってどこでやるんだ？

黄龍「うくんメメントスでいいんじゃない？」

メメントス？なんだそれ？

黄龍「うくんとなんか簡単に言えばみんなのパレスだな。」

パレスって何か知らないかと理解できないんだが……。

黄龍「うくんそうだな。欲望が固まって固まってできたものだよ。例えば……鴨志田ってやつがいたじゃん。」

ああいたな。それで？

黄龍「その人は男子には暴力を。女には最悪なことをそれを現実的に具現化したのがパレスだ。まあ鴨志田は王様だと思ってたらしいよ。」

へえ。じゃあそれがパレスってことはいろんなパレスがあるってことだよな。

黄龍「いや違うよ。パレスだけどパレスじゃないんだ。みんな地下鉄の中に入ったり出たりしてるんだ。」

そして出てるやつは怪盗団によって改心する。まあダンジョンみたいなものさ。」

そうなのか。じゃあ俺もいるのか？

黄龍「いやいたら俺いないからな！」

じゃあ、あいつらが竜司を救ってる時に行くか。そのメメントスってやつを。

黄龍「ああそうだな。じゃあどんな格好がいいかな〜！」

格好？ どういうことだ？

黄龍「ああ言つてなかつた。あのね受け入れたら欲望の前に屈しないように羽衣みたいなのを着るんだ。あと仮面もあるよ！」

仮面……。なんか光つてればいいのでは？

黄龍「え？ ドラゴンの仮面にしようとした。」

いや普通に服は黒くして仮面を明るくすれば？

黄龍「え？ まっまあ俺に任せてよ！」

まあ任せるわ。あとナビってやつは？

黄龍「それぐらい大丈夫入れてあるから。」

そうかあつそういえば武器とか必要じゃないか？ どうしよう。

黄龍「う〜ん。槍とかどうだい？ そして遠距離武器はその槍を投げれば！」

それ戻つて来ねえんじやねえか？

黄龍「こう紐をつけて戻るようにすればいいんだよ。」

それ現実的にできるのか？ それ。

黄龍「いいのいいの。メメントスはそれが本物と思えばできるんだから。」

そうなのか。まあとにかく寝るか。

黄龍「うんおやすみ。」

次の日

双葉は竜司のこと伝えたらしい。そしたら助けに行ったらしい。今がチャンスだよな。

黄龍「うん早く行こう！」

そして俺は黄龍に言われた通りにやりメモントスに入った。

メモントス

ここ変な感じするな。

黄龍「そうだろうね。」

まあいいや。どうすればいいんだ？

黄龍「普通にそこを通ればいいよ。」

あ。でもチケツトは？

黄龍「それはいららないだよ。早く早く！」

わかった。

思想奪われし路

黄龍「ここはたった二層しかないから安心だよ。」

そうなのか?……ん?なんだあいつらは。

黄龍「あれはシャドウだけど違うもので普通にいるシャドウのちっちゃいのが合わさったものだよ。」

そうなんだ。つてこつちに来るぞ!

黄龍「戦闘だよ!ここで自分を認めるんだ!」

惣治朗「チツソウいうことかよ!オレは家族を守れなくて最悪な奴だ!でもオレはお前倒して見せる!」

黄龍「ふふふ我は汝汝は我。ここに契約を結ぶものなり!さあ呼べ!名を!」

惣治朗「来い!黄龍!」

黄龍「がおー!!!」

惣治朗「!決める!」クリティカル!

黄龍「お疲れサマ。大丈夫?」

惣治朗「はあはあ。クツソ疲れる。」

黄龍 レベル99

普通に使える

メギドラオン

マハエイガオン

マハコウガオン

コズミックフレア

サイコフォース

とある条件を満たすところで使える。4個の石を集めると……？

真空波（白虎）

マハジオダイン（青龍）

大氷河期（玄武）

大炎上（朱雀）

メデイアラハン（全部集めた報酬

元から使えるやつ。

魔術の素養

コンセントレイト・

勝利の息吹

黄龍さんは元は主人公から出てきて普通に使われてたけどすぐに合体されたから普通に惣治朗のところに戻った。

4つの石は青龍、朱雀、玄武、白虎の意思を集めると使えるようになる。

なんか黄龍って中央だから使えそうないメージ。

冴島さんの白虎とは違って普通に風特攻。

冴島さんのは物理特攻。魔法なんてつかえない？攻撃力上げたりはできるけど自動。

武器

接近 黄龍の槍

装備は外すこと不可で光り輝いている。

2つの穴に何かはめれそうだ。

遠距離 黄龍の槍 縄付き

こっちもやっぱ外せない。光り輝いている。

2つの穴に何かはめれそうだ。

真の姿をした武器

接近 黄龍の瞳（槍）

黄龍の西と東（白虎と青龍）のいしをはめた真の姿。

これで真空波とハマジオダインが使えるようになる。

遠距離 黄龍の体

鎖が付いておりその色は赤と黒。

石をはめた真の姿であり北と南（玄武と朱雀）の方角を指す。

これで大炎上と大氷河期が使える。

4つの石を集めると青龍、朱雀、玄武、白虎が召喚可能になる。

惣治郎「これぐらいでいいか。はあほんとうにつ……かれ……た。」

オレはここで意識を失った。そのめをとじる瞬間白い服の誰かが見えた気がした

……。

次の日。

惣治郎「うつここは……。俺の部屋？」

そういうことだ？なんで俺が……。ということを考えていたらガチャという音がして双葉と探偵王子が来た。

双葉「惣治郎！どこか怪我していないか!？」

惣治郎「ああ大丈夫だ。それでなんであんたがいるんだ?」

明智「メメントスに倒れてたのを助けたのは僕なんですよ。」

双葉「私はサポートだぞ!……:惣治郎。ちゃんと話してほしいんだ!さつき明智に聞いて惣治郎が危険な目にあってるの知ったんだ!

私は惣治郎を助けたいんだ!」

さてどうするかそのまま話はダメそうだな。

黄龍「ねえ僕が喋っていい?」

いやダメだこれは俺の問題だ。俺のもう一つのこともわかるが俺が決めたんだ。

双葉「惣治郎？」

惣治郎「ちよつとまっけてくれねえか。…あと腹減っちゃまった。ご飯食いてえんだがお前さんも食べるか？」

明智「ええ。ご飯は食べてなかったの。」

惣治郎「じゃあちよつと待ってくれよな。」

さて本当にどうしよう。ここで話しちまった方が早いが……。

黄龍「明智くんも同じだと思うんだ。俺と。」

そんなわけないだろ。いやだがあり得る。だって普通はメメントスとかに居ないはずだ。なあ黄龍。

黄龍「何？」

俺が戦っていた時普通にまだ昼間だったよな。

黄龍「うん。眼を閉じたのはお菓子の間だよ。」

じゃあなんであいつらにはいるんだ？つとカレーが焦げちゃう。

惣治郎「双葉！手伝ってくれ！あと明智もだ！」

朝カレーだぜ！

惣治郎「んでどうしてお前さんがいるんだ？」

双葉「それはわたしが説明する。私たちは普通に竜司のパレス攻略をしてたんだ。そ

したら声が聞こえて……。」

声？

黄龍「……………」

双葉「その声が「惣治郎さんを助けてやって！」って言っててなんかわからないけど私と明智は後ろだったからちよつと嘘ついたんだ。」

明智「僕はちよつとグロイのを見過ぎで気持ち悪いって言って。」

双葉「私はちよつと怖い感じがしていけない。だから一回明智と一緒に戻っていい？って聞いたなら。」

明智「彼はいいよって言うてくれてね。それで戻ってきて声の通りに行ったんだ。そしたら……………」

惣治郎「そしたら俺がそこにいたと……………。なるほどな。」

……………本当にどうしよう。言うていいのか悪いのか……………。

黄龍「一回聞いて見てほしいことがあるんだけどいい？」

なんだ？……………なるほど。明智か。わかった。

惣治郎「確かあんた明智つつったよな。聞きたいことがあったんだがいいか？」

明智「何ですか？」

惣治郎「お前さん。いや明智……………本当に『明智吾郎』なのか？」

双葉「何言ってるんだ？明智は明智だぞ？」

明智「ふふふふ気づきましたね。さすが黄龍を宿してる者ですね。」

双葉「何の話だ？」

明智「まあ今はちよつと黙りますよ。」

惣治郎「そうか……。わかった。」

双葉「……。何が何だかわからないんだが……………」

???『あくあく！聞こえますか！』

黄龍「この声はモイラだよ！」

モイラ？誰だ。

黄龍「モイラは僕の友達だよ！」

そうなのか。でそいつが何の用だ？

明智「ごほん。あの聞いてもいい？」

モイラ『何ですか？』

明智「なぜ神様なのに来れないんですか？」

モイラ「それは……。他の神が邪魔していて……。まるでここを直すなって言ってるよ
うな気がして……。あと上の命令もありますし。」

黄龍「ちよつと意識借りるよ。」

えっちよ!

黄龍「……………何でお前の方うえなの。下の者もできない?」

モイラ『え? お前黄龍? 何でそこに……………まあいいか。俺もやってみたけど上からの圧がどうにかなればいけるのだけど……………』

黄龍「あとでどうにかすればいいのだろう? それならいけるだろう?」

モイラ『まっまあいけるけど……………。あとその男にいるやつ一旦そいつの方に戻しておけよ! じゃあもうちよい粘ってみる!』

黄龍「ああ頑張れよ。」

惣治郎「あ?????……………全くあいつもちゃんと言ってくれよな。」

双葉「????」

明智「あつはははは。ちよつとわからなかつたみたいだから簡単に言う……………僕た」ピンポーン

双葉「誰だ??」

明智「ちよつと逃げるか。とりあえずここに入つて。」

惣治郎「それテレビだけど。」

明智「いいから入つて。」

双葉「わけわからんことだらけだが入るぞ!」

惣治郎「チツしようがねえ！」

なぜかテレビに入れた……。なぜか他のところに移動しているようだ。

テレビの中

惣治郎「つと。ここどこだ？」

明智「こつちだよ惣治郎さん。」

双葉「早くく！」

惣治郎「俺2番目に入ったよな？……まあそんなこと気にしないことにしよう。」

テレビの中 ??

明智「ここならいいかな。……さてようこそ我が世界へ。」

惣治郎「お前さん誰だ？」

????「我が名は伊邪那美大神。普通にイザナミと呼ばれておる。」

双葉「イツイザナミ!?イザナミって確かイザナギと夫婦の!？」

イザナミ「ああそうだ。我の夫よ。」

惣治郎「ふくん。で何の用だ？そのイザナミ様が。」

イザナミ「黄龍を持つ者……。貴様は始まりをずっと見ておったと思う。」

惣治郎「ずっとではないが普通に見ていたな。」

イザナミ「そうか。……。それでその始まりを見ていた貴様にはわかると思うが始

まりは変わった。」

惣治郎「そうだな。」

イザナミ「それは我が夫を宿していた男にもあったじゃ。」

惣治郎「ほう？それで。」

イザナミ「それで始まりを治したいとは思わないのか？」

惣治郎「まあこんな永遠に続くのはもう飽き飽きしてるから終わって欲しいな。」

イザナミ「そうかならば」

双葉「ちよつと待ったく!!!!」

イザナミ「どうしたのだ？オンギョウキを身に持つものよ。」

双葉「そのオンギョウキってのはわからないが何の話をしているのかわかりやすく説明してくれ！」

イザナミ「ふむわかった。秘密のもの！

はい！

イザナミ「説明してやってくれ！」

わかったでやんす！えくと今はっと。ほうほうそこね！普通に言えば……この1年を永遠にループしてるんだよ！

双葉「えつええええ！うっ嘘だろ!!」

ほとんどでやんす。惣治郎さんは1回目から。その明智さんも1回目から。

双葉「な! 何度もループしていたのか!? あと2人も記憶を持つていたなんて……。」

イザナミ「いやあの竜司っていう男もだ。徹底的に相手をはめようとしている。」

双葉「え? 竜司が?」

イザナミ「普通に彼は普通に生きていた人だった。だが壊れてしまったのだ。心がない。」

双葉「そんな!? どうやってたら直せるんだ!?!」

イザナミ「黄龍に直して貰えばいい。」

惣治郎「俺の名前は惣治郎だ。でもどうやって直すんだ?」

イザナミ「ああそれは………すればいいんだ。」

惣治郎「そうすればいいのか。なるほど。」

双葉「直せるのか!? やった! 竜司を戻せるのか!?!」

イザナミ「ああ戻せるぞ。だが一回待たなければいけない。また始まったときに話するのが良いだろう。」

双葉「なんでだ?」

イザナミ「それはな。竜司も警戒しているだろう。竜司だって何度も何度も耐えてきてやっと見つけた突破口だ。それを崩されたら

警戒するだろうな。だが一回すぎると気持ち
を改め新しい方法で出ようとするだろう。」

双葉「なるほど！じゃあ先にそうゆうのを考えてなとな！」

惣治郎「そうだな。考えておこう。俺たち戻らないとな。」

双葉「ん？………あ！そうだ戻らないと！早く明智に戻って！早くしないとあいつ
が戻ってくる！」

イザナミ「ん分かったわ。じゃあ出口に入れ。」

双葉「とお！」

ライダーキックとは……。懐かしいものを……。

黄龍「早く行かなと危ないよ！なんかだんだん崩れてるよ！」

イザナミ「それはそうだ。ここは一応パレスでもあるからな。早く行った行った！」

惣治郎「はいはい。よいしょっと。」

裏切られたものの保護者と??の話5・法王編 後編

惣治郎「ふう。戻ってきたな。早くするぞ双葉。」

双葉「ああ。明智起きろ！」

明智「ん。起きてるよ。早く行こうか。彼の家に。」

惣治郎「……………俺の店だけだな。」

明智「あはははそうでしたね。じゃあ早く行きましょうか。」

ルブラン

真「あ！明智さんと双葉ちゃん大丈夫？」

明智「うん。大丈夫だよ。少し倒れかけたけど惣治郎さんがたまたまいてね。それで体調悪いことを言ったら惣治郎の家に

泊めてもらったんだ。」

双葉「そうだぞ！ちようど本を買いに来ていた惣治郎に助かったんだからな！」

惣治郎「なんでお前が威張ってる……。まあ怪我とかしてなくてよかったよ。双葉に傷つけたら怒るぞ。お前の飯なしだから。」

??「それは困る。」

惣治郎「まあそれは冗談だがな。」

杏「そういえば今日もパレス攻略する？」

モナ「ああそうしたほうがいい。パレスを見た限りだと数週間後に崩れそうだった。」

祐介「じゃあ自分の意思で壊せるのか？」

モナ「それはないだろう。だけど竜司の様子はなんか変だ。」

明智「とりあえずそれは置いてこうよ。まず先に考えておきたいのはパレスを攻略してそしてお宝を出す方法だ。」

人が中にいたということは一度もないんだよね？じゃあ予告状を出してもお宝はでないんじゃないかな？」

双葉「たしかに！どうすればいいんだろう。」

どうすればいいんだ？

黄龍「それぐらい策はあるさ。普通に予告状を出せばいいんだよ。だって普通に今ここでいただく！とか書けばいいんじゃない？」

なるほど。ちよつと言ってみてくれ。明智

え？僕ですか双葉ちゃんがいいなここは。

えっ？私か!?ふふふいいだろう！じゃあ言ってみるな！

双葉「うーん一回普通に出してみてもそれでダメだったら他の方法考えたらいいんじゃない

ないか？」

明智「それは名案だね。僕では閃かなかったよ。」

杏「……………そうだね！そうしよう！」

真「でも内容どうしましょう？」

明智「坂本竜司。お前は仲間を裏切った。今からそのお宝をいただく！とか？」

惣治郎「普通だな……………」

双葉「じゃあもつとかっこいいのにしよう！じゃあなく……………！そうだ坂本竜司！
貴様のお宝をいただく！とかでいいんじゃない？」

惣治郎「……………もうそれでいいと思うぞ。」

祐介「ツツコミを入れるの嫌になったんだ……………惣治郎さん。」

惣治郎「うるせ。俺は怪盗団からいいんだよ。」

??「それもそうだな。じゃあ……………双葉ので行こう。」

双葉「やった！」

明智「きみには負けたが次は負けないよ。」

真「楽しそうね。」

杏「そうだね……………やっぱいいないと落ち着かないや。」

春「どうしたの杏ちゃん？」

杏「なんでもないよ！ちよつと心配だなくつて。」

春「大丈夫だよ。??くんもいるし！」

杏「……………うん。そうだね。」

なあ。あの子も可能性があるのか？

黄龍「うんあるね。でもちよつとだけじやないかな？」

そうか……………。めんどくせえ。……………あの子のペルソナはなんだ？

黄龍「うゝん僕じやわからない。明智に聞いてよ。」

わかった。……………明智

ん？なんです？

あの子のいや高巻さんのペルソナはなんだ？

ああ。彼女のはイシユタルだよ。それは彼女は恋愛だからね。

なるほど。

双葉「惣治郎。どうかしたのか？」

惣治郎「いやなんでもない。今日のご飯を考えてただけだ。」

??「今日のご飯は？」

惣治郎「トルティーヤだ。ちよつとやってみたくてな。生地だけ売ってあったからな。」

?? 「楽しみだ。」

惣治郎 「じゃあさっさと行つてこい。その用意をしないといけねえからな。」

双葉 「よおし！頑張ろう！」

モナ 「にやー！にやにやにやー！」（双葉！お前食べ物につられてんじゃねえか！）

惣治郎 「……モルガナは魚の刺身やるよ、」

モナ 「にや〜！ふにや〜！」（仕方ねえなく！我輩やつてやるぞ〜！）

真 「モルガナもじゃない……。」

?? 「それじゃ行つてくる。」

惣治郎 「ああいつてこい。そしてさっさと帰つてこい！」

?? 「ああ！」

祐介 「俺もご飯が食べたい……！」

惣治郎 「じゃあ救つてきたら好きなもの頑張つて作つてやるよ。難しいものはやめて

くれよな？」

祐介 「おお！やつたぞ！」

めつちや喜んで………。面白いな………！

黄龍 「すぐく嫌な奴になつてゐるぞ……。まあ面白いのは否定しないかな？」

そう言えば明智。

なんです？

あのバカに記憶持ちつてのを教えてやれ。

わかってますよ。というより元からそうしようとしてましたしね。

そうか……。気づくといいな！

他人事みたいに……。まあいいでしょう！やってあげますよ。

ありがとうな。

黄龍「ハア、俺もご飯食べてえ！」

自分で作れ……。つてお前、ご飯食べるのか？

黄龍「作れるに決まってるだろ。バカか。」

なんかイラつくな……。まあいい。さっさと買い物行ってこよ。

結果をいうと勝ったららしい明智に聞いてみると「笑っておいた。でも気づくかな？」って言った。

わかっただけならお前のせいだからな！

その事件が起きたあとそのことを自分全員忘れたように暮らしそして竜司もだった。

そして今回は黄龍によればハッピーエンドだったらしい。

ふーん。どうでもは良くねえがさっさと治ってくんねえかな……。このループは……。

そして次の日…俺があいつに会う日になっている……。めんどくせえな。カランカランという音を立ててドアが開く。爺婆の話聞き流して。

??「あのあなたが俺を引き取ってくれる。佐倉さんですか？」

惣治郎「そうか……。お前が今日来るやつか。とりあえずまずは外に行つてどんなものあるか見てこい。」

??「わかりました……。」

惣治郎「なあ。お名前前なんていうんだ？」

??「天野寂（あまのじやく）です。」

惣治郎「そうか。よろしくな。」

天野「はい。よろしくお願いします。」

惣治郎「じゃあちやつちやと行つてこい。」

天野「わかりました。」

天野はペこりと礼をすると外に出て行つた。その時にノートを落とす。

惣治郎「おい……。つていねえ……。」

爺「じゃあ私たちは帰るわー。お会計いいかい？」

惣治郎「あつああ。」

婆「じゃあまた来るわー。」

惣治郎「ありがとうございます。……なんだこの日記……。俺が渡したのと同じ……。」

読んでみるか

1 4月12日

惣治郎さんから日記をもらった。

まだ信用できない……。

3月

やった！全員仲間だった！

俺は信用していなかったが最後までついてきてくれた！

2 4月12日

どういふことだ？なんで戻っているんだ！

意味わからない！

19 4月12日

またか……。

なんでこんなことを……誰か助けてくれ……！！

あいつこんなこと……写真を撮っておくか。

黄龍「お前……。まあ証拠としてはいいだろう。」

そういえば双葉に確認をしに行かなきゃな。終わったら。

そしてあいつが帰って俺は俺の家に戻り双葉にご飯を置いて……。

そしたらガチャという音がして双葉が出できた。

双葉「惣治郎！覚えてるぞ！」

惣治郎「そうか……。後何やってんだ？」

双葉「明智のスマホをハッキングしてる。」

惣治郎「犯罪を目の前で見た親の気持ちかわかるか……。」

双葉「知らん！まあとりあえず出来事が起こるまで待つててだつて。僕がわざと間違えるからね。つて書いてある……。」

惣治郎「そうか……。あれって毎回めんどくさそうだな。」

双葉「そうだな。普通にめんどくさいと思うぞ。」

惣治郎「だよな。」

そして数日後。明智はわざと間違え竜司と連絡先を貰い愛に行く予定ができたので突撃しようということになった。

黄龍「まあ簡単にいえばだな。だがあいつの精神はボロボロだからやばいと思うんだがな……。」

まあそれは止めないとな。

双葉「遅いぞ！惣治郎！」

ありがとうございました〜！

双葉「あ！レイ！と竜司？」

竜司「……………ああ久しぶりだな。」

なんか様子がおかしいな。

黄龍「普通に考えてそうだろうな。」

双葉「おお。久しぶりだな！竜司！」

竜司「なあ場所うつそうぜ。」

は！思いつく場所は…………。

惣治郎「！じゃああそこなんてどうだ？」

竜司「あそこ？」

双葉「あそこってどこだ？」

双葉「まさか私の部屋とは。まあ掃除したからいいんだけどな！」

明智「本当にきれいだね。でいつから思い出してたんだい？」

双葉「竜司がパレス作った頃には思い出してた。」

竜司「俺は……………何度目か思い出せない。何度目なんだっけ。俺は。でもこれだけは

覚えてる。

みんなが笑顔で終わった次の時には覚えてた。多分2度目ぐらい。」

明智「僕は多分3度目ぐらいだね。君の異変に気づけたからね。」

嘘つけ……という顔で見といた。まあ俺も嘘をつくけどな！

黄龍「お前もか……。」

惣治郎「俺は多分双葉が思い出した頃には覚えてたと思う。」

明智「そっか。で竜司がなんであんなことをしたかだけど……。」ピンポーン！

双葉「ん？今日は何も頼んでもないんだがそうじろう頼んだ。」

まあもうそろそろ来そうだったからなく。

惣治郎「はいはい行つてくるな。……なんでお前らが！」

杏「えつとここに來いって明智から來て……。」

惣治郎「まあ入りな。」

竜司「……………?」

杏「ヤッホー双葉ちゃん！あと明智久しぶり！いや前ぶり！」

春「久しぶり。竜司君と明智君と双葉ちゃん。」

明智「まさか君たちとは……………面白いね。」

お前が送ったくせによ〜！

惣治郎「はあなんでこんなことに。」

春「ふふふまあいいじゃないですか。」

杏「そうだね。………で竜司話したいことがあるんだけど。」

竜司「………惣治郎さんは店に戻ってください。仲間と話したいので。」

惣治郎「ああわかった。」

まあ普通に戻らない……。窓の近くで聞くだけだけだな。

黄龍「これを盗み聞きと言います。」

うるせえな。

竜司「で?どうしたんだ。俺に何の用か?」

杏「何の用か?じゃないわよ!なんであんなことしたのよ!」

竜司「明智の気持ちを知りたかったけど。」

明智「それ嘘じゃないの?」

竜司「ほんとだよ。なんでそんなこと言うんだ?」

明智「いやほんとなのかなあ?って思ったただだよ。」

竜司「へえ、そうなんだ。」

春「なんでそんなに泣きそうな顔なの?」

竜司「泣かないさ。もう……泣かないさ。」

やっぱり精神壊れかけてんだな。

黄龍「まずいぞ惣治郎。竜司のやつ精神崩壊が進みすぎてお前じゃ抑えられないかもしれん！」

そんなことは今は置いとけできなかつたらできなかつたで考えろ。

パレスが見つかりました。

さて店に行くか。

竜司「あ!?!あああああああ！」

杏「あつ竜司！」

双葉の部屋 外

杏「竜司！」

竜司「近づかないでくれ！俺は！もういらなんだ！」

春「竜司君！」

双葉「惣治郎！」

惣治郎「へいへいどしたんだってお前ら！」

明智「待つてよそれが君が選んだのかい？」

竜司「ああそうさ！俺が選んだ！俺が選んで！あいつさえ巻き込めればよかつたんだ

！だけどお前らまで来て！ちくしょう……！

オレハモウコワレタニンギョウダ。モウイラナインダヨ！」（俺はもう壊れた人形だ。もういらなんだよ！）

それは違う……。と言いたかったが口をチャツク。

明智「っ！君はそれを選んだんだね。こうなったら僕も考えがあるよ。」

そして明智がやったことは腹に1発殴り気絶させた。

さてさて持ち物はつとナイフにスマホに睡眠薬……。あとこれはメモ帳いや日記か。

……。あとでちよつと見てみるか

そして竜司は病院に運ばれそしてお見舞いに行くことになった。

そしたら……。

惣治郎「何やってんだお前ら……。

杏「静かにしてください。今明智と竜司が喋ってるんで。」

竜司「！明智!?なんで！あとここは。俺は死んだんじや!」

明智「残念ながら死んでないよ。俺がその寸前で止めたんだ。」

竜司「なんで止めるんだよ。俺はもう壊れたものだぞ?意味わかってるのか?」

双葉「なあ惣治郎。壊れたものってなんだ?」

惣治郎「もう戻れない。そこにいても幸福を感じないってことだな。」

春「そこまでして……。なんで教えてくれなかったの……?」

惣治郎「さあな。俺には知らねえ。」

まあ俺直せるけど。

明智「大丈夫だよ。そうじろうさんが修復するものだったんだ。」

と言った瞬間ばっ！とこつちを見た。

あいつめ……！

竜司「お前は？」

明智「前までは壊れた者だったものさ。でもなぜかあいつが修復するものでね。

はあああ。こつちが困ったよ。」

竜司「そうか。……………俺はどうしたらいいんだろうな。裏切っ

たんだからもうあいつらとは」

明智「そうなんだってみんな。」

杏「そんなこと考えてたなんてバカね竜司。」

春「そうだよなんで言ってくれなかったの！？言ってくれば相談に乗ったのに。」

双葉「わたつわたしだって相談に乗るぞ！」

惣治郎「記憶がなかったから聞いてねえかもしれなかったけど俺でもそれぐらいはな

んか言うさ。」

竜司「みっみんな！ウアアアアアアアアアアくく！」

明智「ふふ泣いていいんだよ。みんなちゃんといるから。」

竜司「おれっ！俺！うわああああん！」

そのあと看護師さんたちは来て理由を説明したら「あまり刺激しないように」と言われた。

黄龍「あいつは刺激すると爆発するのわ！」

と言ったためそんなわけないだろ！と怒っておいた。というより黄龍って俺の心の声だったわ……。

明智「落ち着いたかい？」

竜司「……ああ落ち着いた。こんなみつともねえ姿見せて……悪いな。」

杏「それぐらいいいんだよ！だって仲間じゃん！」

竜司「ああそうだな。」

明智「……いま聞くべきじゃないと思うんだけどまさか手とか切ってないかい？」

竜司「！……それはすまねえ。それは言えないんだ。」

あっこれ切ってるな。

黄龍「普通に切ってたぞ一瞬傷の跡が見えた。包帯も巻いてるしな。」

そうか。

明智「そうかい。じゃあ言える時になったら話してくれる。」

竜司「ああ。」

杏「で。どうするの。あの子。」

そして天野話題になった。

春「とりあえず様子見をしたらいいんじゃない？」

明智「たしかに竜司君が監視係だもんね。」

竜司「まだ参加するって言ってるねえぞ。」

杏「どう言うこと？」

竜司「実は……………」

杏「そんなことがあったんだわたしが明智と話前に……………」

春「……………それでどうするの？竜司君は。」

竜司「俺は……………明智側に行こうと思う。」

黄龍頼んだ。

黄龍「了解！」

惣治郎『そうか。お前さんはそっちを選んだんだな。』

竜司「！そうじろうさん？」

そうじろう「ん？どうしたんだ？」

あつぶねえ！一瞬ひや！ってした……………！

竜司「いやなんでもありません。それで俺はあいつを監視すればいいのさ。」

明智「うん。そうだよ。そしてあいつがこつちのパレスにきた時に敵になればいいんだ。」

竜司「なるほど。でも俺風弱点だぞ？モナとかきたら……………」

明智「それは大丈夫僕が毎回やってるあれでなんとか防げる。」

杏「そんなことでしたんだ……………」。ねえわたしもそつちに行ってもいい？」

明智、竜司「え？」

杏「だって回復しないじゃない。そしたらジリ貧よ。」

竜司「それもそうだけど……………」。でも春がきたらこつち確実に死ぬな。」

春「なんで？」

竜司「そのなんか全部のステータスアップするやつ」

春「ああそれね。でもあれ1人だけだよ。」

竜司「何言ってるんだよ。もしもあいつについてチャージをやられて全体攻撃……………」

明智「大丈夫。僕はランダマイザ持ってるから。」

そうなのか…というより何話しているんだ？

竜司「でも一番の脅威は……………」。真とモナだよなあ。」

真「呼んだかしら？」

モナ「誰が脅威だって？」

竜司「うお！びっくりした。」

俺もびっくりした……。

黄龍「後ろからって一番無理だよな……。」

真「何が恐怖なのかしら？」

竜司「嫌だってモナは復活技持つてるしあと全回復と状態異常直すやつあるし……それに真も全体回復持つてるし。」

真「まあそうね。」

モナ「まあそうだな。」

竜司「あと道具とか怖いし。」

そうじろう「撃ち落せばいんじゃないか？」

明智「そんなことできませんよ。できたらないなあ〜と思うぐらいですね。」

双葉「それならいいところあるぞ！明智！明日秋葉原な！」

明智「あつああ。わかったよ。」

竜司「……………」

そして数日後……。

何かぶつぶつ言ってんな。

黄龍「考え事ぐらいあるだろ。」

そうだな。……もうそろそろ声かけるか……。

惣治郎「おい！竜司！」

竜司「うわあ！なつなんだ。そうじろうさんか。」

惣治郎「お前さん考え事は一旦やめとけ。」

竜司「はい。そうします。どうしたんすか？」

なんかめつちや素直

黄龍「緩和されているからな。前なんかゆう事も聞こえなかつただろう。」

そうか……。

そうじろう「ああそうだ。ききたいことがあつてな。」

竜司「？何ですか？」

黄龍頼んだ

黄龍「わかった。」

そうじろう「俺が神様だつて言ったら信じるか？」

竜司「え？まさかあそんなわけ！」

そうじろう「まあそう思うなら思つとけ。まあいまは乗り移つてるだけなんだけどな。」

竜司「はっはあ。」

黄龍「こいつ信じてねえ。」

そりやあ俺神様だ〜！って言ったたら信じねえよ普通。

黄龍「そうなんだ……。」

そうじろう「まあそれは置いといて。実は俺の知り合いにそういうのを直すやつがいてな。」

竜司「え!？」

そうじろう「まあそれで。まずはそいつにここがやばいところだつてことを伝えただが……。」

「そこ一回おわんないときついみたい。すまない。本当に。こつちだつて入りたいんだが……その何故か入れなくてな。」

だからその記憶持ちの人たちには悪いが辛い体験をするだろうけど一回だけ耐えてくれ！」

そうじろう「だ。そうだ。俺だつてびつくりしたんだ。あいつが解けるもんは1つもないと思つていたからな。」

竜司「じゃあその人が来れば！」

そうじろう「多分この世界は直つて普通にお前さんが20歳25歳とだんだん年を取

れるだろうよ。」

竜司「そうなんですか。じゃあそれをみんなには……。」

そうじろう「だめだ。俺のことは言ってもいけない。いいな。」

竜司「はいわかりました。」

そうじろう「じゃあな。あとすまないな。」

竜司「え？」

おれはふつと消えていきいなくなつたようにした。

そして運命の日……。俺が行くと……。

竜司「な！」

天野「ハハハハハ！なんだつまんない。」

竜司「てめえ！どういうつもりだ！」

天野「は？どういうつもりって元通りに戻してるだけだよだって明智は死にそして君は怒るんだ。」

竜司「は？何言ってるんだ？」

天野「君は本当にバカだなあ。その脳がない頭ですつと考えてなよ。ああそうだ。俺の名は……いや私の名は……。」

「世界《サタナエル》だ。」

全滅していた。

黄龍「これはひどい……。あとサタナエルだと！」

サタナエル「ああやつと来たか……。黄龍。」

惣治郎「てめえ！なんでこんなことを！」

サタナエル「え。あつっはははははははははは！」

なんで笑ってんだ！

黄龍「こいつに話してもあんまり意味ねえぞ。だけど情報は引き出せ。」

わかっている……！

サタナエル「なぜ？なぜか!? そうだな！面白いからだな！人間というものは面白い

！脆く負の感情を出しそして死んでいく……。はははは！これは傑作だ！」

惣治郎「人間は確かに脆いし負の感情を出して死んでいく……。だが死なないやつ

だっている！」

黄龍「そうだ。人間は確かに脆いし死んでしまう。だが貴様に言われて欲しくはない

！構えろ惣治郎！」

惣治郎「わかっている！」

俺は武器を構えて……。切りに行こうとした。だが……。

サタナエル「バカだなあ！バカすぎて……。遊べないじゃないか！」

俺の腹に向かって銃を撃ち……。それは当たらなかつた。

サタナエル「ほう……。面白い。避けるとは……。まあ良いこれで終わらせるか……！メギドラオン！」

黄龍「くそ！それは避けられない！どうすれば……！」

どうするか……？こうするんだよ！俺は前を向きダツシユで相手に近づく！これは一応俺に当たるだろう。だけど今は勝てるという確信を持っている……。ということは自分を守るのとはできていないはずだ！こいつはそんなこと考えていなかったみたいで……。

サタナエル「な！なぜこつちに向かつてくる！………まさか！」

惣治郎「気づいてもおせえ!!死ねば諸共じゃねえと思うが傷だけは喰らえ！」

サタナエル「くつくそおおおおお!!!」

そして元に戻っていた……。

天野にあつたが何もなかつた。だけどあいつが東京に戻る日……。

天野「惣治郎さん。」

惣治郎「どうした。」

天野「あのありがとうございました。あいつを懲らしめてくれて……。でもあいつはまだ諦めてないみたいなので……。

もう一回やってください……そうしたら俺は……。」

惣治郎「言わなくていい。次こそはやってやるよ。だからそれまで待つてろ。」

天野「はい……！あとのメモ帳返します。あいつの情報が入っているので……。」

惣治郎「ああありがたくもらっておくよ。」

確かに情報は書いてあったが……。まだ言わないほうがいいな。

黄龍「そうだな。そのほうがいい。」

そして黄龍が呼んだであろう人たちがきた。美玲に冴島……。そして神咲翔。

こいつらに情報を与えないとな……。とっておきのをな……。そしてこのループが終わりあいつが成長していることを願う。

惣治郎編終わり